東医大誌　69(2)：184-209, 2011

医　学　史

高橋琢也と学生達（疾風怒濤の物語）（4）（中）

友　田　燁　夫
Akio TOMODA

東京医科大学生化学講座

【要約】　高橋琢也は大正6年6月30日に東京府東大久保に敷地を求め、新医学校設立に向けて新たな一歩を踏み出そうとしていた。その矢先の7月半ば、文部省より立教大学の医学部設立構想が浮上しているという話が高橋琢也に突然伝えられた。この案は日本医学専門学校を総退学し東京医学講習所に学ぶ四百数十名の医学生達をそこに収容しようというもので、文部省はそれを強く推し進めた。実は、文部省（とくに松浦鎮次郎専門学校局長）が立教大学の築地から池袋への移転計画を知って、立教大学へ医学部を併設するという構想をもちかけたというのが本当のところであった。しかしながら、これは高橋琢也が進める新医学校設立計画にとっては大きな障害となってしまった。また、本部会の学生達は有望と見られた立教大学医学部設立話に食指を動かした。本稿では、立教大学による医学部設立案の発端とその結末までの裏面史について述べる。とくに高橋琢也と学生達がこの問題に如何に関っていったか、高橋琢也日記および本部会記録をもとに、日を追って詳述する。

目次

1.　はじめに
2.　東京医学専門学校設立のための敷地購入と新校舎建築
3.　中濱回生病院購入と移築について
4.　学生団の再結成と新医学校設立への関与
5.　上野における絵画頒布会による資金調達活動（以上前号）
6.　文部省主導による立教大学医学部設立構想と高橋琢也の苦闘
　1）発端　2）学生団による本部会の結成と立教大学首脳（元田作之進学長、ライフスナイダー総理、マキム主教）との交渉　3）立教大学医学部設立問題のさらなる展開　4）結末
7.　学生達の徴兵忌避問題とその顛末（以下次号）
8.　東京医学専門学校認可に至るまでの高橋琢也の苦闘
9.　エピローグ

6.　文部省主導による立教大学医学部設立構想と高橋琢也の苦闘

1）　発端

東京府東大久保に購入した敷地での新校舎建設が間近となった大正6年7月17日、文部省専門学校局長・松浦鎮次郎から高橋琢也[1]に一本の電話が入った。詳しくは翌日文部省にて話すということであった。それは立教大学の医学部（正しくは医学専門部）設立に関してであった。

平成22年11月22日受付、平成23年2月19日受理
（別刷請求先：〒160-8402　東京都新宿区新宿6-1-1　東京医科大学生化学講座　友田　燁夫）

大正5年10月に政権は大隈内閣より寺内内閣へと交代し、文部大臣は高田早苗より岡田良平（**写真1**）[2]へ代わった。文部次官は田所美治（たどころ　よしはる）[3]となるが、専門学校局長は松浦鎮次郎（まうつら　しげじろう）（**写真2**）[4]が留任した。岡田良平文部大臣は明治10年に制定された帝国大学令を改正し大学令を新たに制定することで、それまでの教育制度の大改革を行うことを文部省の大きな目標とした。この問題は明治時代の後半より議論されてきたものの、制度改革までには至っていなかった。明治36（1903）年に公布された「専門学校令」では、私立大学は名称のみ大学と付されていたが、実質的には専門学校とみなされていた。例えば、早稲田大学（前身は東京専門学校）も相変わらず専門学校として扱われていた。明治時代の後半ともなると時代の要請もあり、5つの帝国大学以外にも大学を承認しようという動きが進み始めた。前大臣の高田早苗[5]もその解決に注力したが、果たせないまま終っていたのである。就任早々、岡田良平文部大臣はこの教育改革の断行を策定し、本格的に動き始めた。この改革の骨子はそれまでの私立大学や専門学校を正規の大学へと昇格させることであった。

我国の大学は明治10年に初めて開設され東京大学1校のみであった。東京大学は明治19年には帝国大学と改称され、我国唯一の大学としての地位は不動のものとなった。その後、明治30年には京都帝国大学が、その後東北帝国大学、九州帝国大学の併せて3つの帝国大学が創立され、さらに北海道帝国大が東北帝国大学より分離して設立された。この間、帝国大学は東京帝国大学と改称され、大正5年までに5つの帝国大学のみが大学として認められていた。しかしながら、それ以外の官公私立大学は大学の冠がついていても専門学校とされていたのである。それを官公私立を問わず、専門学校を大学に昇格させようというのが今回の骨子であった。40年近く変えられなかった我国の大学制度を大幅に改革することを、大正5年10月の政権交代後の文部省は一大目標としたのである。

この教育改革を遂行するにあたり、文部省は諮問機関としてそれまでの教育会議を**臨時教育会議**に改組し、委員を相当数入れ替えした。それは、大正6年9月に公布された「**臨時教育会議官制**」の法律に基づいたものであった。この臨時教育会議は第二次大戦後の学制改革に大きな役割を果たした教育刷新委員会に相当するものであった。この委員会の中に、日本医学専門学校理事長・**山根正次衆議院議員**[6]が入っていた。このことが高橋琢也の進める新医学専門学校設立に大きな障害となっていったことは想像に難くない。山根正次は寺内正毅総理大臣[7]の郷党（長州萩藩）であったことから影響力は大きかった

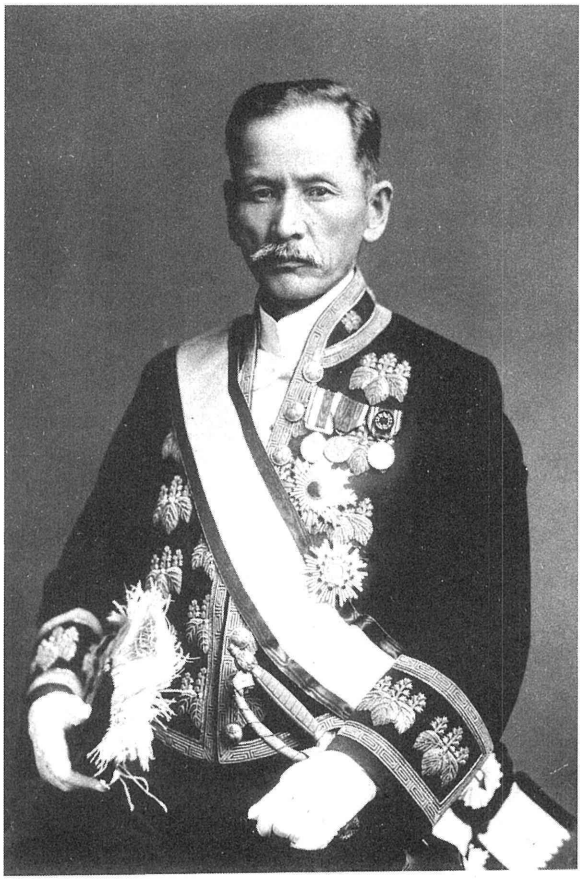

写真1　岡田良平文部大臣

写真2　松浦鎮次郎文部省専門学校局長

と考えられる。

また、大学令制定をめざした文部省は一定の基準を満たしていない新規の専門学校設立は承認しないという方針を強く打ち出していた。その推進役は文部省専門学校局長、**松浦鎮次郎**であった。臨時教育会議のメンバーは次のとおりであった[8)9)]。

大学および専門学校関係（＊印は高橋琢也の考えに賛同し、あるいは協賛者となった方々である。[10)]）：＊鎌田栄吉（慶應義塾大学）、平沼淑郎、＊成瀬仁蔵（日本女子大学）、高木兼寛（慈恵医学校）、沢柳政太郎、桑田熊蔵、鵜沢総明、**山根正次（日本医学専門学校）**

帝国議会関係：＊江木千之、阪谷芳郎、＊三土忠造、水野直

枢密院関係：＊小松原英太郎、一木喜徳郎、久保田譲

行政関係：木庭貞長、＊田所美治、＊水野錬太郎

帝大関係：＊山川健次郎、荒木寅三郎、真野文二、北条時敬、＊加納治五郎、手島精一

実業界：荘田平五郎、＊早川千吉郎、小山健三

問題となった**立教大学**[11)12)]は大正6年当時、学校の本体は東京築地にあったが、築地のキャンパスを池袋に移転させることを明治後半より構想し、既に一部は移転していた。立教大学は文部省の「大学令制定構想」に則って池袋に大学を集約しようとした。その資金は米国における寄附金を主体とし、250万円（現在の250億円相当）の募金を目標とした。この計画が文部省の知るところとなったことから、文部省は立教大学に医学部設立の話をもちかけたと考えられる。文部省は日本医学専門学校より総退学した学生達と、日本医学専門学校に残る学生達とを立教大学医学部に収容し、日本医学専門学校紛擾問題を一気に解決しようと動き始めたのである。とくに、松浦鎮次郎局長はその急先鋒であったと考えられる。

立教大学の前身である立教学院［明治32（1899）年にこの名称を用いている］は米国聖公会というキリスト教伝道会の基金によって、明治7年に東京築地に設立された。なお、聖路加病院は同じ米国聖公会のルドルフ・トイスラー宣教医師によって1902年に築地に設立されている。立教学院は設立当初は神学校中心であり、ウィリアムズ（Williams）主教の手によって学校が運営されていた。1907年に立教大学（**写真3**）[12)]が設立され、初代学長は元田作之進（もとださくのしん）（**写真4**）[13)]、大学総理（理事長）はライフスナイダー（Charles S. Reifsnider）（**写真5**）[14)]となった。また、伝道を統括したのはマキム主教（John MacKim）（**写真6**）であった。大正5、6年当時、立教大学は元田とライフスナイダーの二人の手で運営されていた。二人は米国の寄附金を基金とし、立教大学の本体を築地より池袋へ移転し始めていた（**写真7**）[12)]。そして、この話を知った文部省は立教大学に医学部を設立するよう申し入れたのである（高橋琢也日記[15)]）。

以上のような経緯を背景として、松浦局長から高橋琢也への電話連絡があった。その内容は高橋琢也日記[15)]に詳しく残されている。以下、高橋琢也日記[15)]と本部会記録[16)]に記載されている内容を日を

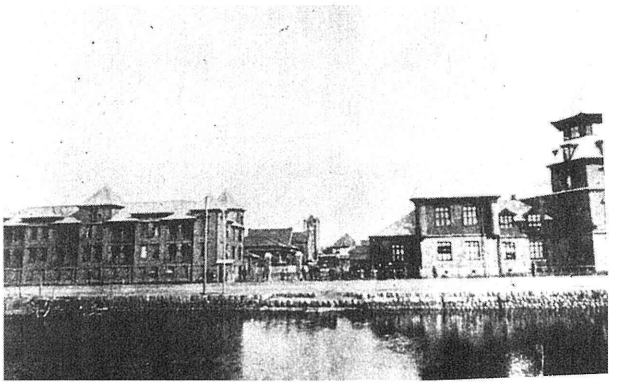

写真3　立教大学築地の校舎建物（立教大学立教学院史資料センター提供）

写真4　元田作之進立教大学学長（立教大学立教学院史資料センター提供）

写真5　チャールズ・ライフシュナイダー（Charles Reifsnider）立教大学総理（立教大学立教学院史資料センター提供）

写真6　マキム（MacKim）主教（立教大学立教学院史資料センター提供）

追って記載し、説明を加える。

高橋琢也日記 / 大正六年七月十七日　　午後七時半頃、松浦専門局長、電話を以て予と直話して曰く、「明後午後一時、文部省に来られしこと」

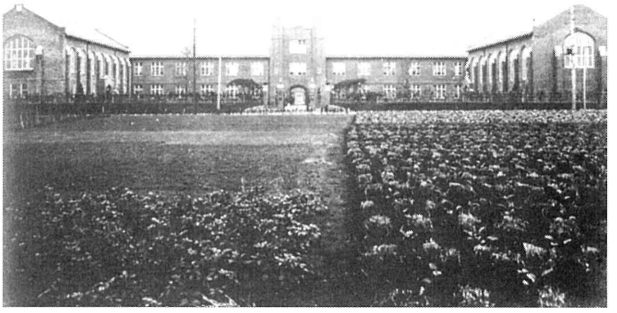

写真7　立教大学池袋の校舎建物（立教大学立教学院史資料センター提供）

を懇請し、予は承諾したり。

翌朝再び来話して曰く、「都合あり、午後二時に延す。」と。依りて予は二時十五分前に文部省に松浦局長を訪う。来客あり。

三十余分待ちたる後、面会して曰く、「貴下の医専設立の計画も追々進捗しよる趣なるが、茲に一つ懇談ありて、来省を乞うたる次第なり。他にあらず、医専のことなり。折角御尽力中なるが、彼の日本医専退校生四百名を救済するの目的を達する同時に医専の設けることにて、其実**米人の経営する立教大学校**にて日本医専を引受け、磯部等をして関係を絶たしめ、之を彼の四百余名の退校生を入らしむるときは、彼等も旧校に帰入する訳にあらずして、支障なかるべく、又既に医者は多しとの世論もあれば、二学校の設けて過剰を為す必要もなし。貴下も此上尽力を煩すことなしと思う。貴下の意見如何。」と。

予曰く、「四百余名の学生にして之を快諾し、予の学生及び協賛員等に対する面目が立つ次第なれば、同意せざるにあらず。而も予は既に地所（敷地）買約を為し、病院の貰受（後買入の止むなきに至れり）且石黒男爵其間の斡旋の快諾せられ、既に移築の手続に係り、又学校は富士見町四丁目十二番地十三番地の校舎を買約し、目下移築の見積中なり。協賛員中には既に寄附金の出したる人あり。故に御交渉は別として着々設計履行に向て進み行くに付御承知置き△△」と云いたり。

局長之を首肯し、「尚（田所美治）次官よりも此議を話したしとのことなれば、御聞取あり

たし」と云うに依り、夫より共々次官室に至り、鼎坐して大略同一のことを問答せり。

次官曰く、「貴下の老体を以て尽力せらる、同情に堪えず。外人の之を引受るに至らば、好都合と思う」と。尚予は願書及経営案並に学校病院設立案を置きて辞したり。校舎及病院の図は局長に見せたり。

要は立教大学の池袋キャンパスに医学部を新設し、そこに東京医学講習所学生達を収容するという、松浦鎮次郎局長の一方的な申出であった。高橋琢也は願書、経営案、学校病院設立案、および校舎病院の図（上記下線）を用意し、文部省にそれらを提示したにもかかわらず、高橋琢也の進める新医学校構想はこのような立教大学医学部設立という松浦局長の突然の提案に翻弄されることになっていった。翌日、高橋琢也は田所美治文部省次官を自宅に訪問し、文部省の真意を確認した。

（高橋琢也日記 / 大正六年七月）十九日朝、田所次官の土手二番町の自邸に訪う。予曰く、「昨日の御懇談は確なる話なりや。」

次官曰く、「確実なる話なる立教大学の米人が遣度（やりたし）と云うので、実は三、四ヶ月前にも一度其話ありしも、其時は条例等に上に於て疑義ありたる為め中止したるが、今回は先方も人も異なり、申出も違い、且つ元田作之進氏が関直彦氏を通して申込み来り。文部大臣も米人に会談すると云うが、大臣が、仙台に立つとき曰く、『留守中に纏りを付て呉よ』と。昨日は松浦局長は元田作之進に面談したる筈なりと。」

予曰く、「然らば学校移築の着手は如何にすべきか」。

次官曰く、「一寸中止して貰たし」。

予曰く、「日本医専の名を改めて東京医専とし、旧幹部一切関係を絶つにあらざれば、四百余名の退校生は立教大学の医専に行ざるべし。如何」と。

次官曰く「夫は無論なり」。

而して予としては、「協賛員及現講習所教員の始末あり。是等に対し、又社会に対し予の面目の立たざることには応諾し難し。如何と」。

次官曰く、「貴下の面目を立つことは無論なり」。

予曰く、「次官は三井、岩崎に向て寄附に付不十分の話を為し居る為め未だに寄附金確定せず。予困れり」と。

次官曰く、「少くも五万円の位出だして上げざれば困難なる故え、少しく待れたり」。且ついわく、「貴下の老体を以て此事に非常に尽力せらるる、同情に堪えず。故に一挙三得（立教大、日本医専、東京医専）。△都合を図る積りなり。」と。此時、女子大学長某氏来訪の為め、辞△せり。

田所美治文部次官は松浦鎮次郎局長の上司ではあったが、立教大学医学部構想は松浦の独走であり、田所次官抜きで話が進んでいた模様である（上記の下線部分のように、田所次官はこの時点では立教大学側より文部省に申込みがあったと思っていた。しかしながら、後日これは松浦鎮次郎局長が立教大学へ申し込んでいたことが明らかとなった）。田所次官はこの日は高橋琢也に対して大変歯切れが悪く対応した。なぜなら田所美治文部次官は高橋琢也とは入魂の間柄であり、高橋琢也の進める新医学校設立には大きな理解と好意を示していた［田所次官は早い時期（大正6年秋）に協賛員の一人となるとともに、東京医学専門学校が発足したときの評議員の一人となった］。高橋琢也が田所次官に「次官は三井、岩崎に向て寄附に付不十分の話を為し居る為め未だに寄附金確定せず。予困れり」と述べたことは、この頃、立教大学医学部問題が浮上し、新医学校設立に向けた高橋琢也の活動が邪魔されてしまったことを言っている。三井、三菱などの大財閥は寄付先がはっきりしないという理由で、大口寄付を渋っていたのである。翌々日（7月21日）、高橋琢也は再び文部省を訪れ、松浦局長、田所次官に面会して今後取るべき道について質した。

高橋琢也日記 / 大正六年　七月二十一日　午前中外室。金子（堅太郎）、大森（鐘一男爵、宮内大夫）、井上、波多野（敬直宮内）大臣。（大島健一）陸軍大臣、（寺内正毅）総理大臣、大谷（靖）伯、（加藤友三郎）海軍大臣、柳田、寺田、（後藤新平）内務大臣、内務省、西園寺（公望）公、秋元（興朝）子、（岡田良平）文部大臣、（田所美治）次官、松浦（鎮次郎）局長訪問なす。

午前十時過。文部省に松浦局長に会談。「学生帰省前且移築中止の為め、急速に交渉を為さんば、予の困難甚しきを以て、貴下の所見を聴度。」と云いたるに対し、局長曰く、「明後月曜に先方と会見の△約あり。申入の趣了承せり」と。次て約に依り、岡田大臣に面会、前日次官局長より伝聞の要△を述べ、大臣の意見聞く。

大臣も大体次官、局長と同△のことを云う。依りて、予も亦次官、局長に答えたると同様のことを述べ置きたり。

次官列席に付き、次官の岩崎、三井に寄附は待てと云ふたることの不都合を述べ置きたり。次官苦笑す。別に沖縄の教育費を国庫より特別に補助し国語の普及を計れと、大臣、次官に云い置きたり。所得税延期の△院委員会に大蔵大臣の国庫補助明言ありしを幸と、幾分の之より出すことを乞いたり。地方局長も同感なりしを説きたるに、首肯せり。

この日、高橋琢也は文部省に岡田文部大臣、田所次官、松浦局長を訪問するとともに、金子堅太郎子爵、寺内正毅総理大臣を始め有力な閣僚を次々と訪れている。そこでは新医学校設立への状況の説明と懇請を行うとともに、突然湧き上がった立教大学医学部設立構想の話についても説明したと考えられる。

大正六年　七月二十二日　日曜日一日休み。来客、夜に至り、徳久。其後金子（堅太郎）子爵邸へ行く。

高橋琢也が明治 30 年に我国初めてとなる森林法の制定に関わったとき、金子堅太郎[17] は農商務省次官であった。高橋琢也とはその時以来の親しい関係となった。金子堅太郎は米国ハーバード大学に留学し、米国における日露戦争終結交渉に活躍した我国きっての米国通であった。金子は米国との関係が密接であった立教大学の医学部設立問題を把握していたことから、高橋琢也は早速金子子爵を訪問したのである。高橋琢也の行動力は想像を絶するものがある。

大正六年　七月二十三日　午前中工業銀行、拓殖銀行。午後より医学講習所望む。

この日、高橋琢也は東京医学講習所に行き、夏休みを控えた学生達に各学年より 2 名づつ代表者を出すよう要請している（大正 6 年 10 月 30 日談、高橋琢也日記[15]）。さらに 7 月 24 日には再び松浦鎮次郎局長に電話し、立教大学での医学部設立構想の進捗具合を確認した。その背景には高橋琢也は既に、東大久保に敷地を入手し、校舎建築のための買収も進めていたということがあった。それに対して、松浦は「立教大学の件は都合よく進むであろう」と答えたのみであった。

大正六年　七月二十四日夕　松浦局長に通話して曰く、「前日、御談示の件は如何に運びつつありや。明後日は買入学校校舎の解取り着手の契約期限なり。一方の違約の責任あり。他方に九月授業始めまでに、校舎の移築の要す。」

予、「創立委員長として進退答る、如何にして然るべきか。」

松浦曰く、「昨日、大臣、次官、予と（以下朱書）外人三人及元田（作之進立教大学学長）[13]」と会談したるが、多分都合善く運ぶべし。外人列席の為め、元田も深く立入りて話さざりしが、尚明日元田に話して委細のことを質すべし。何とかして貴下の方は延期せられんことを乞うと。」。

依りて予は「速に相運ばれたしと」云うて電話を切りたり。

高橋琢也と文部省とのやりとりはさらに続いた。また、三井財閥へも説明に訪れている。高橋琢也日記には「**大正六年　七月二十六日**　天気好し。来客、文部大臣使い。」「**大正七年七月三十一日**　天気晴。鈴木半（蔵）。午前中文部省、三井。」と記載されている。

その後、立教大学医学部設立構想の進捗は明瞭でなく、高橋琢也はその年の 9 月 7 日より東大久保の敷地内に新校舎建築を開始した。高橋琢也日記[15]には「**九月七日**　朝より医学生三人。外志やしんや。十時より棟上式に望む。午後より来人、佐々木政吉、佐和正、子息、小島。」「**九月十一日**　平栗、仕事仕六番組かしら。鈴木半藏。」と書かれてある。高橋琢也は独自に新校舎建築を進めるとともに、応援する閣僚や重要人物に毎日のように面会し、新医学校設立を訴えていった。高橋琢也日記では「**九月八日**

朝九時より（後藤新平）内務大臣に面談。夕食後佐々木四郎を訪う。」「**九月十三日**　松原、当間。午後、原敬訪ぬ。鈴木久作。」「**九月十七日**　雨天。井上、佐々木、荒川義太郎葬式、浅野〈長勲〉、文部省。」「**九月十八日**　中濱（東一郎）、石黒（忠悳）、学校、田所（美治）、俵、山本を訪う。」「**九月十九日**　朝より文部省、武井守正、西園寺（公望）、秋元（興朝）。夕、精養軒。竹下二人。三井、拓殖、広部。来人、安藤、松原。ラサ島会社長招かる。」「**九月二十八日**　朝より後藤（新平）、原（敬）、政友会本部、赤十字石黒（忠悳）を訪う。入金壱千円也、後藤（新平）より。」「**十月十三日**　朝より自動車にて高橋是清、団（琢磨）、農商務省、朝吹（常吉）、ビール会社。山科（礼蔵）、朝鮮銀行、内務省、金子〈堅太郎〉を訪う。来人、医学生三人。」「**十月十四日**　田所（美治）を訪う。来人、佐々木政吉（医学生）外一人。竹下〈文隆〉、左右田、鈴木久作。」と書かれてある。さらに、10月30日の朝、松浦鎮次郎に7月24日以来の電話をかけた。

> **高橋琢也日記 / 大正六年十月三十日早朝**、松浦を呼び出し、三井へ答弁の不都合を責む。（松浦の言では）「予と四百余名の退学生の為めには無論同情し居るも、米人は十一月六日に帰京するに由り、消息も△り。先方は確実の話なりと信ず。先方の話出のときも四百余名の退学生を救済する目的なるを其事は先方も承知し△り。」
>
> **午後より医学講習所望む。**

さらに、この日の午後、高橋琢也は東京医学講習所に出向いて、学生達を集めて外人による医学部設立構想（立教大学の名前は出さなかった）が起きていることや、自分が進める新医学校設立への方針などを伝えた。また、各学年の代表からなる本部会が自分と常時連絡を取るよう要請した。高橋琢也と本部会学生の集まりを秘密会と称した。その内容は以下の本部会記録[16]（10月30日）に詳細に残されている。

> **本部会記録 / 大正六年十月三十日　午後二時十五分開始**
>
> 教室の硝子窓を締め、扉を鎖ざして四顧に立聴きするものなきかを気遣う。然る後、高橋先生徐々に口を開かる。
>
> 諸君は之れを聞くばかりにして、決して他言してはならぬ。他の人に之れを口外すれば却而諸君の不為めになる事と思う。
>
> 去る七月十七日、松浦専門学務局長から私の所へ電話がかかって「明日の午後一時頃文部省へ来て下さる訳に行かぬか」と問われた。「次官からもそう云う御頼みだ」と重ねて言われた。
>
> 私は「一体如何云う御用事ですか。」。処が「医学専門学校の事に就てだ」と云う御挨拶。而して「それじゃ参ります」と承諾した。
>
> 翌日の午後一時頃前約の通り文部省に出頭した。
>
> 生憎今来客があると云うので一時間余り待たされた。それから会って訊ねてみると「用事は他にあらず、今貴方がやって居らるる医専の事に就て篤と協議致し度い。今朝大臣が仙台に行かるる時も、『私の留守中に良く相談してて呉れ』と云う御頼みでした。
>
> 其の要点に就て申せば、外に一つ医学専門学校の立派な物を建て度いと云う人が居る。其処で貴下の方の学生を其処へ写すと云う訳に行かぬか」と尋ねられた。私は「夫れが出来ないとは限らぬ。学生の希望を容れられ、私の顔が立つことで、学生がそれで良いと言うことならば、私に何等異存はない。只私の意見としては四百余名の学生が救済されると云う事なら、それで宜しい。然し学生が厭だ、そう云う方へ行き度く無いと云う事なら致し方がない。琢也が今日迄苦心して五百名近くの協賛員を揃えた。私は之等の人々に対して踏み付ける訳に行かぬ。それで琢也の面目が立つようにしてくれぬか」と問うたら「それは勿論だ」と言われた。
>
> 「又教員に向ってもそれ相当の手段をとって貰い度い」と言うたら「それは追って協議する」との事だ。段々良く話を聞いて見ると、「それはamerica人で、二百五十万円と云う金でやる」そうな。「それじゃ予ねて聞いて居る所の聖路加病院でないか」と問うたら、「それは人も違う。兎に角次官と共に語ろう」と云われて導かれた。
>
> 「大臣から『何卒か、私の留守中に打明けて呉れ』と頼まれた。貴方がその老年で学生の為め一生懸命に骨折って居らるる所を見ると、誠に同情に堪えない」と次官が云われた。
>
> 而して私は「之れを少しも苦痛とは思って居ない」と答えて置いた。一方で「america人と一緒になり、米国式の最新医学を教授して貰え

ば、学術上完全にもなり、間接には日米親善の意味にもなる。外人に対しては政府で之れを許可す」、と云ってやったそうだ。愈々具体的に成案が立ったならば、日本医専も共に合併して、諸君とは久し振りで顔を見合すようになるかも知れない。其時磯部は全然関係を断つと云う事だ。

「学校の名称を東京医学専門学校としたら如何だ」と訊ねたら、それは「解らぬ」と答えられた。

「私は既に校舎を買い入れた」と云うたら、「それは困る。少し待って」と言われた。それから請負師との契約も済んだ事や、是迄の経過を話して来た。

大臣の帰京を待って、七月十九日大臣と語った。

次官も見えた。其処で私は「学生に謀る迄の具体案があれば良し。さもなければ待てと言われても待つ事が出来ない」と申した。

私が顔が立つようにと言ったことが、外人は金でも取ろうとかかって居るんじゃないか知らんと疑い始めた。

そこで次官は「此の人は磯部のような人間と違う。人格の人である」ことを弁明したら、毛唐（けとう）には漸く合点が行った。「そんなら宜しい。兎に角本国へ帰って交渉して来るから」と云う事であった。

日米協会の金子堅太郎氏等も其の間に在って大に尽力された。次官や局長が待って呉れ。も少し待って呉れ、と言われても、折角それをあてにして、それが出来ぬとなれば困るから、私は其の後とも学校の建設に力を注いでおる。

夏休みに際して、諸君の中から各級代表者を二名宛選出して呉れと云うたのも、全く此の必要から起こった事である（註：翌々日の大正 6 年 11 月 1 日に学生団による本部会が結成された）。

寄付金等の事で、協賛員から本校の事に関して文部当局に問合せると。文部省では何時も少し考えがあると云われた。その事が是迄悪い意味に誤解されて、非常の障害となった。此の間、次官が本校の協賛員に署名された。

本校の卒業生が医師試験を受け得る何か良い方法がないかと尋ねたら、（田所）次官は何とかすると答えられたが、局長はそれは六ヶ敷い（難しい）と言われた。

而して其の話はそれ切りとなった。

最後の回答は十月六日、米国から帰って来るから（註：フライシャーのこと）、それが来れば消息がわかる。

「本日学生に此事を発表して宜しいか」と問うたら、次官は宜しいと云う事だ。

一面又悦ぶべき事は、文部省では多少諸君を認めて居る。今度学校を起すと云う米人は中々立派な人で、或は時として諸君が日本医専と合併するような事になるかも知れん。

政友会では今度私を教育調査委員に上げた。私は元来山林の方に関係を有って居るから、その方の役なら適当だと思うが、教育調査とは意外に思ってる。それも此の学校に関係ある事を認めたからであろう。

臨時議会の時、大臣連にも会った。原（敬）総裁や三上（忠造）氏等が特に本校の為めやって呉れてる。

今度中浜さんの病院を譲り受けたに就て、其の医員が本校の教授上に預かるようになるかも知れん。教務一切の事は佐藤達次郎博士や池上先生が遣って呉れてるから心配はないが、事務や庶務の事に関しては、自分が全責任を負わなければならぬ。今度事務員二人を罷めさせた。それは肥田（理吉）と小島だ。肥田は kakke（脚気）で兎角欠勤がちで困った。

小島は誠に実直な人で精勤家だ。之の人を止めさせるのは甚だ情に於て忍びないが、自分の責任を託して居って困難な事がある。

秋（虎太郎）が罷める時に小島も罷めさせて呉れと頼まれたが、事務の引継ぎが円滑に行くまいと思うて今日迄使って置いた。

竹下（文隆）は国論社の方を兼ねてやってるから、此処へ終始来る訳に行かぬ。

又鈴木（半蔵）は絵画の方を引き受けて居るから、是又やられぬ。創立事務所を兼ねて居る必要上、諸種の交渉にてきぱきやって呉れる人でなければならぬ。又それに充分堪え得る人でなければならぬ。恰度幸之れに適任の人を見出したから、是からそれにやらせようと思う。

小島は誠に気の毒ながらも、そう云う訳で止めさした。余り突然だったが其の間に運動でもされたりすれば、却て事が面倒になるから、敢

て断行した。全責任がたった一人の私にあるので。私は飽く迄も自分の責任を充分尽すつもりで居る。

高橋琢也は松浦鎮次郎では埒があかなくなって、翌日10月31日に文部次官・田所美治を訪問した。そこでの会話は次のようなものであった。

高橋琢也日記　大正六年　十月三十一日　文部省に（田所美治）次官を訪う。次官より「前日米人ビショッフ（主教のこと）・マキム、ライフシュナイダーと元田と大臣、局長と共に面談せり。貴下の面目を立つると云う意味を解せざる様子なりしにより、高橋は人格の高き人なり、知事、局長もせし上に地位、名望ある人なり。磯部とは異なり金銭問答の彼是れ云う人にあらずと云いたれば、然らば合同したしと云う。何れ本国へも紹会してやる由なり。」と。

予曰く、「然らば時日の費すに依り、予の事業の中止するは困難なり。他日合併は苦しからずとして、予定の進路に進む。御承知、承知乞う。」。

次官曰く、「承知せり。元田と会談せられたし。自分等も合同すべしと。」。

又、予曰く、「諒承せり。予定の進路に進むに就いては、三井、岩崎の方へは善く挨拶を頼むと。」。

次官曰く、「承知せり。」。此日局長は会議中の為めに面会せず。

高橋琢也が大きな期待を寄せていた三井、三菱などの大財閥からの寄付が、文部省の立教大学医学部設立構想のためにストップがかかっていたことから、高橋は再三、田所次官に要請を行っていたのである（上記下線）。なお、立教大学医学部設立問題の発端からその推移（大正6年7月17日より10月31日まで）については**表1**にまとめた。

2）学生団による本部会の結成と立教大学首脳（元田作之進学長、ライフスナイダー総理、マキム主教）との交渉

11月1日には、高橋琢也は前文部大臣・高田早苗や、かつての高橋琢也の上司であった武井守正や、原敬が主宰する政友会の本部を訪れている（**高橋琢也日記 / 大正六年　十一月一日**　朝より、大橋、青山、高田（早苗）（百円也）、武井、政友会本部、紅葉館。来人、松原、佐々木政吉）。一方、学生団学生達は高橋琢也の要請を受けて、この日第一回本部会を開き、立教大学の調査を開始した。高橋琢也は本部会の学生達には正確な情報を伝えていた。学生達による調査の内容に関しては学生達の手による本部会記録[16]に詳しく記録されている。スナイダーとは正しくはライフスナイダー総理のことであり、

表1　立教大学医学部設立問題の経緯（大正6年7月17日より10月31日まで）

大正6年	
7月17日	松浦鎮次郎専門学校局長より高橋琢也へ電話があり、「翌日、文部省へこられたし」との連絡があった。
7月18日	**高橋琢也は文部省に松浦局長を訪問。立教大学に医学部設立問題が起っていること、東京医学講習所に学ぶ学生達をそこに収容したい旨が伝えられた。**
7月19日	高橋琢也は懇意としている田所美治文部次官を自宅に訪問し、前日の松浦局長の説明について確認を行なった。
7月21日	高橋琢也は、金子堅太郎子爵、寺内正毅総理大臣、ほか有力閣僚を次々と訪問し、さらに文部省に岡田良平文部大臣、田所美治次官、松浦鎮次郎局長を訪れ、立教大学医学部設立問題の具体的な説明を求めた。
7月24日	高橋琢也は松浦局長へ電話し、東大久保の地に敷地を購入し、新校舎の建設に着手することを伝えたが、松浦局長は立教大学での医学部の設立が都合よく進行するであろうと述べた。
7月26日	文部大臣の使いが高橋琢也を訪れた。
7月31日	高橋琢也は文部省を訪問した。
9月18日	高橋琢也は田所次官を訪問した。
9月19日	高橋琢也は文部省を訪問した。
9月28日	高橋琢也は後藤新平内務大臣、原敬政友会会長を訪問。
10月14日	高橋琢也は田所次官を訪問した。
10月30日	高橋琢也は松浦局長に電話をいれ、三井財閥が寄附を躊躇していることについて、その不都合の責任を追及した。同日、**高橋琢也は東京医学講習所に出向き、学生集会において、立教大学医学部設立問題等について説明した。**
10月31日	高橋琢也は文部省に田所次官を訪問し、文部省と立教大学の首脳部との会見の内容を伝え聞いた。

マキムとはマキム主教、元田とは元田作之進立教大学学長のことである。また、ルドルフ・トイスラー博士は聖路加病院院長であり、同じ米国聖公会の伝道者であった。トイスラー博士は米国より日本に戻ったフライシャーと入れ替わりに 11 月 6 日に渡米し、現地で募金活動の促進を訴えた。トイスラーは立教大学、聖路加病院含めて大規模な大学医学部を設立するという考えをもっていたが、ライフスナイダー総理やマキム主教は小規模な組織から医学部を立ち上げていくことを考えており、意見が大きく異なっていた。両者は米国での募金活動の規模についても自ずから考えが異なっていた。高橋琢也や学生達は日本にいるライフスナイダー総理、マキム主教、元田作之進学長らと交渉することになった。11 月 4 日、10 日、12 日の本部会記録[16] にはその様子が詳細に記録されている。

本部会記録 / 第二回本部会議　大正六年十一月四日　午后六時より学生会本部（信陽館）に於て第二回本部会議開催（第一回の本部会会議は 11 月 1 日に開催された）

一 . 報告事項

A　高橋先生訪問顛末（後藤、杉山、佐多）

秘密会の件（筆者註：秘密会とは高橋琢也と本部会学生との秘密会議であり、11 月 1 日より開始された。）

（先生は文部省との交渉顛末を記載せる書類を読み上げたり。然して要するに先生は独立振興を経営するよりも合併案に傾けるが如し）。外人出資額は二百五十万円にして元田作之進氏（立教大学校長）が関直彦氏を介して文部省に申込みしものなり。以前の立教大学合併問題とは全々別なり。されど東医、日医、立教にとりては好都合なり。

外人の関係者はセーヤ、マキーム（トイスラーにあらず）なり。国際病院（註：聖路加病院のこと）との関係は今言明を避く可し。本件は金子（堅太郎）氏に問合せしに確実なりと答えあり。文部省よりも本件の為め東医の事業中止を申込みたり。

本件が成立するとせば日本医専にはただ金を与えざる可からず。自分は顧問に推薦せらるれば承知せざる事もなかるべし。現在本校は日医よりよき位置にあり。されど本問題には難関あり。

自分は本問題は別として自己の計画は飽く迄実行すべしと申入れたるに文部次官は諒とし局長は喜ぶ風を見ず。（筆者註：田所次官と松浦局長の考えの乖離が明らかである。）

米国よりの返答は十一月六日には日本に着す。されど発表期日は不明なり。

備考　マキーム、キリスト教監督官　セーヤ、資産家

B　意見交換

古川君　—　トイスラー（正しくはライフスナイダーのこと）会見当時の参考談。

もし合併が事実とすれば敷地は府下池袋の約一万三千坪なる立教大学の地なるべし。

日本医専使用説　立教大学使用説

本部会記録 / 第三回本部会議　大正六年　十一月十日　午后一時半　開会

調査係報告（佐多）

トイスラー訪問は古川、無断帰国のため未だし（筆者註：聖路加病院病院長であるトイスラー博士はライフスナイダー総理らとは意見が異なっており、米国での大々的な募金活動をめざして無断で渡米したものと考えられる。11 月 6 日の渡米のことをいっている）。

意見交換

佐多　—　文部省に伺って調査の歩を伸ばすこと。教授を介して行えば更に可なり。

杉山　—　立教大学総理シュナイダー博士（筆者註：11 月 6 日に米国より日本に戻ったフライシャー博士の間違い。ライフシュナイダー総理はこの時点では東京にいた。）は六日日本に帰れり（朝日所載）

調査係増員と担当　文部省調査　教授に依頼

外人と交渉　古川、荒瀬、江並

本部会記録 / 第四回本部会議　大正六年　十一月十二日　午後一時半開会

報告事項

高橋先生訪問（後藤）

学生側の質問　—　1.　シュナイダー氏（フィッシャー博士のこと）は六日に

帰京せり。その後文部省と先生との交渉ありしや。

2. 学生は外人問題の有無に関せず。従来の方針を積極的にとる。而して吾人はやがては学校設立さるる事は信ずれども、要は時期の問題なり。少くとも来年二月には医師試験を受けたし。不幸にして更に延期する事あれば、四月には徴兵検査に逢着し多数の犠牲者を出すべし。然る時学生は大動揺をなし将に不利の結果となる。故に学生としては先生の具体的成案の発表を希望す。

3. 先生の方針は学生の見地よりすれば将に不徹底なり。現在に於ては外人問題を主として、従来の方針は従となれるか。或はその反対なるか。頗る了解に苦しむ。又外人問題もその後交渉更に進捗せるものと信ずれども如何。

4. 校舎倒潰の直後竹下（文隆）氏二三日中に認可申請すべしと云いたり。如何。日本医専も校舎設計の際は文部省の指図をうけたり。設計図はなるべく採用されたし。

5. 合併問題が実現するとして万一日本医専に先鞭をつけられ、此方は傍観の位地になるとせば大部分の学生は去る可し。後手とならざるを希望す。

高橋先生答弁

(1) 六日以後文部省とは未だ交渉をせず（女中に命じて電話にて局長を呼出したるに不在。次官は留守（大演習）。大臣と対談して十二日面会を約す）。

(2) 認可請願書の下書を局長に呈出せるも局長よりは是非に関して何事の返答無し。他校の財団も参考のため見たしと申込めるも許可せず。外人問題が解決せし後にあらざれば認可は問題とならざるが如き、文部省の意向なり。寄付金は現在集まりしもの一千円三人、五百円三人、三百円若干人、百円に十人なり。横浜にては知事、市長、大谷嘉兵衛氏等を委員として二万円を集むる方針なり。（認可申請の件、寄付金）。

（先生赫怒す） 今更方針が不明にて方向に迷うとははじめて聞きたり。外人問題は文部省より持ち出したる事なり（更に先日の帳簿を読むと、先日は聞かざりし立教大学の文字を二、三回聞きたり）。

二、三日前、吉村某来りて曰く、自分は現在日本医専には関係なし。されど先生が老齢を以て新校を経営せんとする労力は気の毒なり。学生を合併しては如何。日本医専は已に七月末立教大学と契約を附せりと（吉村参事訪問し来る）。今度の合併も元田の関する所なるべし。（之も先日否定したる所也）

要するにこの問題は当方より申出るは不得策なり。文部省よりの話を待つを可とす。外人問題は本校が加入せざれば不成立なり。自分としては万一この事が不成立として万全の策に従来の方針を続行す。合併問題を実行するには三要点なり。(1) 自己が新校の関係者となる事。(2) 協賛員に対して自分の顔を立つる様に文部省より新聞に発表し、顛末を発表する事。(3) 学生処分。而して学生には講習所一年半の授業は有効となるべし。（寄付金はその場合返却してもよし）

諸君は不注意に外人と面接するが如き事あれば及で自己に不利の結果を来すやもはかられず藪蛇をせざる様にせよ。

意見交換

後藤 — 池袋の立教大学敷地には已に煉瓦建家屋に棟成る（**写真 7**）。

江並 — 昨日立教大学訪問。セーヤ不在。小使に質したるに本校は大学 P 学生千二百人あり。校舎せまし。来春四月は池袋に移る予定なりしが延びて九月となれり。今日は午後三時面談の筈。

高橋琢也は 11 月 13 日に松浦鎮次郎を文部省に訪問し、立教大学医学部問題のその後の推移を質した。

高橋琢也日記 / 十一月十三日　朝より文部省、松浦〈鎮次郎〉面会。二十日に返事と云う。岡田来吉を訪う。福原有信、関根、稲茂登三郎。藤原銀次郎、交渉すと云う。富士ぼうせき、高橋面会。

午前十時　文部省に松浦（鎮次郎）を訪ぬ。其

後経過を質す。松浦曰く、「米国に行きたる米人は六日に帰来せり。戦時の為め、寄附金は未だ来ざるも、石井（菊次郎）子の助言やら大統領、ロックフェラ等皆賛成、好都合なり。差向、今回持ち帰たり趣なり。フライシャーの帰りたるなり。之に入違にトイスラーが行きたり。今月二十日には確答ある筈なりと。

予曰く、「先般、貴下の合併問題は学生に発表して然るべしと謂れたるに由り、過日之を学生一同に向て発表せり。（筆者註：10 月 30 日に学生達に外人による医学部設立構想と高橋の進める新医学校設立の進行状況を説明した。前出）其意向を見るに、不同意はなかるべし。然るに六日には米人帰来し、其消息を聞き得たる筈なるに付き、彼等も之を待居る為本日来訪したるなれば、今日の話は直に彼等に移し支えなきや。」。

松浦曰く、「大体支えなし。」。

予曰く、「先日元日本医専参事、吉村某、特に来訪して曰く、『日本医専は先般文部省と契約を為しえて、セイロカ病院へ合併することに確定せり。石井氏の助言や大統領の賛成に由て五百万円の寄附金出来たり。貴下の講習所学生も之に合併せられんことを望む（然るときは講習所にて修学したる課業も之を専門学校にて修学したるものと看做す云々）（括弧は松浦に話さず）。双方好都合と信ずれば御熟考を乞う』と。事実なりや否やと。」。

松浦曰く、「契約と云う程にはあらざるも、大体其通りと承知せられたし。」と。此事の今日迄文部省が予に秘して告げざりしは不都合と云うべし。

実際は吉村某が述べたよう（上記下線）には行かなかった。日本医学専門学校は大正 6 年より 7 年にかけて多額の負債をかかえて危機的状況であった（高橋琢也日記[15]、本部会記録[16]）。以上のように文部省専門学校局長・松浦鎮次郎は立教大学医学部設立により、東京医学講習所に学ぶ四百数十名の学生と日本医学専門学校に残った学生とを収容し、問題を無理やり解決しようとして、その構想を前面に押し出してきた。これに対して高橋琢也が取った妥協案とは次のようなものであった。

立教大学に合併私案

1. 四百余名の学生の快諾せしむるに足る成案を要す。学生の面目を立て、且つ講習所中の授業を認め、試験を有効とすること。
2. 東大久保の東医専敷地、学校校舎処分の件
3. 富士見町四丁目の処分の件
4. 中濱病院に対する謝礼のこと
5. 講習所教員及び事務員採用のこと、又解職者への相当手当のこと
6. 佐藤博士へ謝礼の事
7. 委員の内一人名誉校長と為すこと
8. 講習所及び東医設立の費用弁償のこと
9. 合併は文部省の発意にして、東医創立委員長の発意にあらざることを先方費用にて公表すること
10. 前項委員長の面目を立つる手段を取ること
11. 指定を与うること。少くとも予約を為すこと

高橋琢也は立教大学医学部が設立された場合のことを想定して、以上の条件を提出した。しかしながら、松浦鎮次郎は高橋琢也の立場を斟酌することなく、立教大学医学部構想に拘泥していった。これに対して高橋琢也は淡々と東大久保の敷地内に新校舎の建設を進めた。11 月 14 日には「十一月十四日 高嶋小金治、橋本新次郎、杉山茂丸、久米商会、桂川水雪。服部時計店、大倉喜三郎、森田退蔵、柳谷宇三郎（弐百円也）金入。川上直之助（百円也）。午後より金子子爵を訪う。」と日記に記載されてある。

さらに次の 11 月 15 日の本部会記録[16] には学生達が立教大学総理ライフスナイダーとマキム主教に面会し具体的な考えを質すという奮闘振りが残されている。また、そこには立教大学側の動きも詳細に記録されている。

本部会記録 / 第五回本部会　十一月十五日 午後一時半開会

報告事項

高橋先生訪問（青山、中本）

△本問題の為に、本月六日米国よりフライシャー氏が来り、同時にトイスラー氏は帰米せりと、文部省の言なり。この事は日米協会にて聞きても同様なり。米人出資の二百五十万円は二百五十万ドルの誤りにて、即ち五百万円なり。金額にはあやまりなきも只今戦時中なればその金全部が来る

と云うわけにはゆかず。石井（菊次郎）大使なども尽力して応急策として一電気会社が三十万円を出す出来事となれり（五百万円は米国に於て、寄付金にて集むるものなるべし）。この三十万円は（米国の）寄付金が集まり次第、償還すべきものなり。されど若し金が不足の際は、そのまま寄附するも可なりと。兎に角、今の所三十万円は出る様になれり（米国より外人の手に）外人と本校との交渉決着は今月末には明かとなる。之は学生に話しても差支えなし。

外人訪問（古川、江並）

トイスラー氏（米国へ）帰国。ロス君の紹介にてマキーム氏及び立教大学総理ライフスナイダー氏に十四日午前十時事務所に於て会見。

（主として総理ライフスナイダー氏が語る）

本問題は今交渉中なり。いましばらくにして決定すべし。日本医専は合併するにあらず。買収するなり。磯部氏及びその他の理事は全々関係をなくす。学校の名はしばらくそのままとするか、或は変更するかは未定なり。

未だ磯部、高橋両氏に直接会いたる事なし。すべて文部省にて仲介の労をとる。されど今後は高橋氏とも会見の見込みは充分あり。

池袋の方は三、四月頃漸く大学部のみを移転す。中学部はそのままなり。

本日諸君と御目にかかりし事は非常に喜ばし。この問題が決定次第直ちに本部古川君宛に通知し、面会する事を再び口約すべし。但し高橋氏は諸君の先生なれば、諸君に通知する前一応高橋氏に交渉する余裕を与えられたし。

（江並　一　之を総合するに医科は築地に置き、聖路加病院を使用するなりと思わる）

外人問題は未だ表面に表われす。かつて外人が文部省に問いて自分が医科大学を起すが、許可するやと問いたるに、学校の出来ざる中は不能と。然らば既成の学校を引きつぎては如何と。然る時は可なりと答えたり。その既成の学校日本医専なり。若し日本医専が外人の手に移る時は自分の方も入れてくれと高橋先生の申出せしは事実なり。（されど氏は極力外人問題は秘密にするらし）。また外人に対する交渉は石井大使も米国にてなしたり。

土曜日に清水（茂松）、田沢（鐐二）先生と相談の上、文部省にも調査に行く可し。高橋先生への用事は時間経済上出来るだけは電話にてなす。

諸君は外人問題が万一やめになりし時は学生全体の利益を思って行動せざる可からず。）

本部会記録 / 第六回本部会議　大正六年 十一月十八日（日）　午後一時半開会

報告事項

池上（作三）先生訪問（中本富太郎）

外人問題の対立は諸君の為によろこばし。而してこの問題がよき方に向える時、教授が公然と文部省を訪うはよき方法にあらず。得能文氏は文部の医学参事官とじっ魂なれば、同氏に依頼して調査すべし。而して時至るを待ち、合併運動を起すが可なり。聖路加病院の副院長久保学士も親しき間なれば、事情を聞くよう。合併問題には少しの障害あるも実行するが得策にて教授もその方の運動に尽力をなすべし。

高橋先生にも少々の事は忍んでもらい、教授はその学校に行く行かぬは何れにてもよき事なり。聖路加病院にはよき教授も多ければなり。

立教大学医学部問題は新聞にも公表された。中央新聞では「立教大学学長スナイダー博士」となっているが、立教大学総理ライフスナイダーは大正6年11月6日の時点では東京に滞在しており、この記事のスナイダー博士とは11月6日に米国より日本に戻ったフィッシャー博士のことと考えられる。フィッシャー博士は恐らくトイスラー博士の命を受けた聖路加病院関係者であろう。

（新聞記事）　大正六年十一月二十日　　朝刊中央新聞　宮成修三

さきに日本聖公会発起となり、現立教大学に新に二百五十万ドルで医科大学を設置すべく計画し、其基金募集の為めに同大学学長（ラ

イフ）スナイダー博士は渡米し、各地に遊説せる所、其結果予想外の好評を受けて居たが、折柄石井特使一行は紐育（ニューヨーク）に滞在中なりしより、其賛成を受け、一日一行の臨席の下に其計画発表会を同市に開催し、（ライフ）スナイダー学長計画趣旨発表に亜いで、石井特使は特に日本に於ける聖公会の事業を紹介、称揚せる結果、頓に来会者の甚大なる喝采を博して即刻予定義金の半額百二十万ドルの拠出を受け、残額は来春二月迄に送付の事となりしを以て、同学長は直に帰朝の途に就き、去る六日帰朝（大正 6 年 11 月 6 日のこと）。愈々更に本邦に於ける有志寄附金募集に手を染むべく目下諸般準備中であると。如上、米国の義金拠出中にはタフト、ルーズベルト、ロックフェラー、カーネギー氏等の同国知名の政治家、実業家も入っていると。

本部会委員の学生・中村丈夫は 11 月 21 日、高橋琢也を訪問し、立教大学医学部設立問題について相談した。

本部会記録 / 第七回本部会議　大正六年 十一月二十一日　午後六時二十分　開会

「今度米人が経営さるる学校は、さし当り学生を収容する程の校舎なし。然る時何処にて授業を受ける事になるや。余等は如何しても日本医専の門を潜ぐるを潔しとせず」と中村（丈夫）氏切り込めば、老骨（高橋琢也のこと）答えて曰く「万止むを得ざる時は詮なかる可し」。中村氏矢継ぎ早に「大久保の新校舎竣成を一日も疾く願う。然る時は余等の勢力も頓に加わる可し」と。老骨黙笑 --------- 。

合併問題に関しては当初より色々の要求、諸条件を持ち出さぬ方宜し。然らざれば、外人の感情を害せぬとも図り難し。殊に教授云々に就て然りとす。

米人問題の成否は本月末日までに、（米国に帰国中の）トイスラー氏よりの返電に依りて定まる。時として或いは来月初旬にならぬとも計り難しと。目下の処三十万円は持って来てある（俄に声を潜めて）渋沢男なんかも国際病院（註：聖路加病院のこと、渋沢栄一は初代理事長となった）等に就き裏面に於て関係してるから、それで寄付金を出さないのかも知れずと呟かれたり。

其他種々の雑談に時を移す。両者非常に打寛ろぐ　（高橋先生訪問報告終り）

○外人と面接の件延期（多分明日あたり行う）

○医海時報抗議の件延期（之も明日あたり）

さらに 11 月 22 日、本部会委員である古川道之助は立教大学のマキム主教に面会を求めた。そこでは米国において立教大学の医学部設置を中止する決議がなされたことが話された。その内容は本部会記録[16]に詳しく残されている。

本部会記録 / 第八回本部会議　大正六年 十一月二十三日（金）　午後二時開会

◎米人問題に就き報告（古川道之助）

昨二十二日午後一時、マキーム氏を訪問す。先ず訪問の理由を述べ、次いで「合併成立後の校名に付き、世間の誤解を招き易き故、決して日本医学専門学校として呉れ給うな」と申せし処、マキーム氏答えて曰く「若し其の時は日本医専なんと云う校名は附せず。多分立教大学医学専門部と云う名称を附するならん」と。次に言葉を継けて「本日、本国より悲観す可き電報来りて失望す。と申すは、是迄事務員附記として本問題に預かり居りしが、其の事務員宛に決議の結果**中止する旨伝達された。**それは議会に於て、或る条件が容れられぬ為めであろー」と。古川（道之助）氏曰く、「其の或る条件とは恐らく日本医専買収の事なる可し」。

「明後二十四日、元田作之進氏並にシュナイダー氏を文部省に遣わす可し」と。**此の問題は文部省から当方へ持込んで来たのだから**、頼まれた甲斐もなく、夫れが出来ぬとなれば面目ない。

マキーム氏は、再び本問題を携げて、一月十二日、日本を出帆し、明年二月十二日に開催する会議に出席して再議決をへる考えなり。

因にトイスラー氏は来年二月中には日本に帰らるべし。

池袋の方で、明年四月より授業するかは不明なり。

立教大学内に医学専門部を設置すると云う事は本国議会の可決になりしものなり。然し

其の資金十万弗は、目下欧州戦乱の影響を受けて一文も集まらず、と云う。
「此頃、新聞、雑誌の報ずる記事に就き、真を置きて可なるや」と古川氏の質問に対し、マキーム氏答えて曰く、「それは全部とは言われず。或る所は相違せる点もあり」と。
〇米人問題に就き、諸子の意見大略
中村〈丈夫〉氏曰く、「来年二月、再議決を経たる上の合併ならば、本問題は茲に見切りを付けて、吾人は当初の目的通りに進行すべきなり」と。
中本（富太郎）氏曰く、「明日立教側では文部省に出頭して復命する故、之れに対する文部大臣の意見もあるだろうし、又文部省から高橋先生に対して話があり、又高橋先生の意見もあるならん。依って、其辺の消息を聞き知りたる上、能うべくんば日医の方は抜きにして、此方ばかり引き取って貰う事にしては如何？　而して来年二、三月頃迄指定の許可を得るよう努力するが良し。要するに本問題は学校、学生間の問題とせず、公然之を社会に発表して、研究し、成就せしむるにあり。若しそれが出来ぬとあれば詮なし。それから最初の目的に向って進むも遅くなかるべし」と。
鈴木（達夫）氏曰く、「米人問題余りあてにはならず。依りて是迄通りに高橋先生に懇願して、極力学校の方を進めて貰う方良かる可し」と。
後藤（哲雄）氏曰く、「文部当局の是迄の方針として、吾講習所と日医とを如何に処置せんかと云う問題に就て、非常に頭脳を痛め居るなる可し。文部省としては日医を主に置き、講習所を副に考え居る事と信ず。然し立教大学の側から云えば、我が講習所を主に置きて、日医の方を副に見てる事と思う。何となれば、日医は貧弱ながらも、兎も角認可学校として存在してるからには、之れを買収するには多額の金を要する。従って、条件もむつか敷い。翻て吾が講習所は目下の処、未成品である。従て幾千の金を要するでなく、其の侭学生を持って行かれる。文部省の意向としては立教、日医、東医の三者にとって、合併問題が成立したら、其方が各々得策なりと考え、且つは社会からの解釈も宜しき故、斯く計りたるなるべし。
愈々東京医専が高橋先生の手に由って成立したとすれば、文部当局の失策と謂う可し。今後文部当局が高橋さんに会って、如何様に陳ずるかは興味ある問題なり。
是迄本部委員がとった行動は、聊かも藪蛇的ならざりし事と信ず。此辺の消息を詳細に亘って老骨に報告する必要あり。今不幸にして先生在らず。故に之れを電文に認めて予告せん。愈々談判不調に終れば却て我等の為め好結果を産むやも図り難し。例えば寄付金に於ても然りとす。今後が真に我等の活動すべき時機たる可し」と。
（附記）後藤氏の言わるるが侭、一同の協賛を得て、目下阪神地方にあらるる高橋先生の許へ、早速左の電文にて注進する事にせり。
「亜米利加ヨリ　マキム　ニ見合セノ電キタ　御帰リ待ツ　学生本部」
電文　　大阪市東区道修町　花房旅館内
高橋琢也　様
因に先生は、多分此の二十六日頃帰京せらる可しと。

この日の記録にあるように、立教大学に医学部を設立することは文部省より持ちかけられた話であることがマキム主教より明らかとなった。また、米国における資金調達活動が頓挫している情報がマキム主教よりもたらされたことから、寄附活動のために大阪に出張していた高橋琢也に電報された。このように本部会の学生達は立教大学首脳と直接会談し、医学部設立構想の推移の正確な情報を得ていた。この電報によって立教大学総理ライフスナイダー総理とマキム主教は米国での募金活動を実現させ、立教大学の医学部設立運動を継続することを決意した。それは二人の大正7年1月13日の渡米となって表れる。

3）立教大学医学部設立問題のさらなる展開

本部会記録 / 第九回本部会　大正六年 十一月二十五日　午後六時半開会

報告事項　(a) 立教と直接の相談　(b) 講習所の協賛員、顧問が立教大学にも尽力する様に斡旋す。

合併の条件　(a) 学生は現状維持にて引き継ぐ事　(b) 校名は立教大学の随意とする事。

合併問題が今日直ちに成立せざれば講習所に認可を得、従来立教大学との関係をつくるも可也。文部省に建白す。

この日の会議では学生達は文部省にも建白書を出すことを検討している。11 月 25 日に高橋琢也は大阪より帰宅したことから、本部会委員の学生・長委三美、後藤哲雄、江並猛らが高橋を訪問した。

本部会記録 / 第十回本部会　大正六年 十一月二十七日　午後六時半開会

報告事項

1. 高橋先生訪問　　二五日夜訪問（長）御機嫌伺い　　二十六日朝訪問（後藤）後藤、江並、寺師、荒瀬

先生曰く、本部よりの電報により予定の行動を中止して帰京せしに、昨日は誰も来らず。竹下（文隆）に訪いしも不明。自分は大体この事は推したり。外人問題が中止となるとも、之は文部省より申越せし事なれば、本月中は文部省に任せ、来月は直ちに状況を聞きに行く可し。日本医専の買収条件が何なりやは知りたきものなり（学生より聖路加病院久保学士が池上先生の友人なる事を云いしに先生よろこばる）。久保学士の手づるは頗る便利なり。マキムと日医との契約書あるべき故、それを探りだし、日医買収は不調となるとも立教大学に医科を置く事が定まれば更に好都合なり。

己に（田所）次官は三十万円は来て居ると云いしが、自分とても十五万円の金は土地や骨董にて出来る故、直接外人に面会し、直接に妥協をする考えなり。米人が十五万円、自分が十五万円出せばすぐ学校は出来る。共立として後、米人に譲るも可なり。今まで自分は認可の期日を延ばしつつありしに非ず。日本医専は今度は困るべし。

合併の際の校名は自分は夙に考え居る事とて、学生が外人に云うとは余計の事なり。今回大阪にゆき、渡辺秀なる人に紹介され「しずか」なる人に面会せり。しずか氏は京都大学に学生を二三人も出し居り。寄附の話も快諾せられたり。藤田（註：藤田組）にも一万円を要求し、住友の支配人にもあう。寄附と云う事は頗る困難なれども、自分は老人と云う事と誠意とにより相談は早くまとまる。

自分は今度この邸宅と地所とを売りたり。新校舎附近に移る考えなり。便利の地にて室七乃至八、土蔵付きがよし。

（委員は家を学生の方にて捜すべきを約せり）

大正 6 年 11 月 29 日に、高橋琢也は立教大学に元田作之進学長を訪問している。

高橋琢也日記　大正六年　十一月二十九日　元田（作之進立教大学学長）、政友会本部。

11 月 30 日の秘密会議では、立教大学関係者の中でもライフシュナイダー総理とトイスラー聖路加病院院長とで進め方の違いが高橋琢也によって明らかにされた。また、立教大学医学部構想は不調に終わったことが述べられた。この時期、トイスラー博士は既に米国に渡り、募金活動の推進を行っていた。

本部会記録 / 第十一回本部会　大正六年十一月三十日　午後一時十五分　開会

認可問題に就きては老人（高橋琢也のこと）より先に口を切り、「その案は恰も自分の説と符節を合するが如し。外人問題（註：立教大学医学部設立問題のこと）は明かに不調に終れり。文部省は外人に日医及び東医の合併を依頼し、立教大学にてもシュナイダー氏は合併賛成にてトイスラー氏は反対せり。文部省へ不調の通知は、元田作之進が斉したり。而して文部省は之まで日医を盛にして東医の学生を帰らしむる方針なりしが、今度は方針に大変動を起せり。

十二月三日には予算の閣議あり。それが終り次第、文部省に於て日医及び本校の件に付き尚議あり。故に文部省は三日迄待ってくれと高橋氏に申込めりと云う。」

「尚議の結果は五日頃松浦局長より通知の筈なり。」

高橋氏は自己の財産を全部財団に投ずべき事を文部省に話したり。「而して今学校をこしらえて後は大なる手に譲るも可なり。

尚、学生は守るべき秘密は絶対に守られたし。本部会の内容などよく知れ居れり。

11月29日の高橋琢也と学生達の秘密会では、高橋琢也は11月27日に文部省を訪問した際に、文部省が立教大学に医学部設立の話を持ちかけたことが明らかとなったと述べた。学生達はすでに立教大学を訪問しこのことを把握していた（11月23日のマキム主教との会談）。11月29日の時点で、立教大学での医学部設立構想は頓挫していたが、トイスラー博士による米国での募金とロビー活動が継続されていたことから、文部省、とくに松浦鎮次郎局長は医学部設立構想を断念していなかった。

本部会記録 / 第十二回本部会　大正六年十二月二日　午後一時半開会

報告事項

高橋先生訪問（後藤哲雄）　二十九日日本医専債務調を持参してゆく。

先生曰く、「二十七日文部省にゆき買収の件を質したるに、始めは買収は立教より文部省に依頼せしものなりと云いしが、後の口吻にて文部省が立教大学に懇願せしこと明かとなれり。二十五日に立教の元田及びシュナイダー（ライフシュナイダーのこと）二氏出頭し、交渉不調を告げ、更に来春二月マキム氏が本国の会談にて再決議を成すべしと云いし故、文部省としては今後新方針をとり、その場合認可を与えるや否やは不明なりと云いたり」と。

三十万円問題は追及せざりき。（学生には合併は今にでも将来にでも希望する処也と云いたるに）「立教大学にては医科新設希望ある故、直接自分の方に交渉し来るやも知れず。又文部省に対し、工事の遅延も合併問題にて文部省より注意せし為なれば、認可をくれと云いしに、文部省は先月は予算案んて多忙且大臣は病気にて欠席せし為、手をつけざりしが、本問題の文部省最後の決議は来月（十二月）四、五日には決定し、五日に自分が文部省にゆく事となれり。兎に角よき結果となれり。日本医専調査はよき事なく、出来次第持参せられよ。」

12月2日には日本医学専門学校理事・磯部検蔵が高橋琢也を自宅に訪問した（高橋琢也日記[15]）。この時期、日本医学専門学校の経営は極度に疲弊し、高橋琢也に買収を求めてきた。その詳細は次の本部会記録（12月5日）に記載されている。また、この時期、高橋琢也と学生達は上野美術協会における絵画骨董販売会を企画していたことから、元田作之進学長とライフスナイダー総理の12月22日の美術協会行きとなったのである。

高橋琢也日記　大正六年　十二月一日　午後より政友会本部へ行く。来人なし。

二日　午後二時より金子邸へ法事に行く。磯部検蔵来る。

三日　田所（文部次官）、浅田、山中、小田、飯田、団（琢磨）。早速鎮蔵の会葬に行く。

四日　愛国婦人会、松平頼寿、美術協会、文部省、三井。北海道三十円税金、拾弐円六十銭送る。来人、有吉、鈴木半藏。医学講習所病院立まえ式。

本部会記録 / 第十四回本部会　大正六年 十二月五日　午後六時半開会

報告事項

高橋先生訪問（後藤哲雄）

昨夜（12月2日のこと）珍らしき人の訪問ありとて磯部検三の名刺を示し（註：日本医学専門学校理事）、俄の来意を告ぐるに曰く、「吉村氏（日医主事）が已に高橋先生と相談して来れり。之からは人を介しては意志も通ぜざる故に直接参上せり。自分の学生が紛擾を起して退校し、帰れと云うも帰らず。自分の方にも現在学生が居りて今処置に困る。お互に合併したし。自分はかなり金の為に尽力するも地位なく、又上流にも知己なき故に、金は出来ず。然して今やその筋より重大なる二つの事件が起って頭を悩ませり。」と、それより日本医専の成立より経過、債務状態に迄精細に語りて去れり。

自分は文部省に電話をかけて磯部氏の来りしを告げしに、（田所）次官は「あーそーか」と云いて失笑せり。磯部にはその時、次の如く答えたり。「自分の方は合併と云う問題は少しも考えたる事なし。只学生本意に自己の財産を投じ、協賛員をつくりて奔走す」と。自分は認可の来る事は信ず。

磯部検蔵は高橋琢也に日本医学専門学校と東京医学専門学校を合併するように提案したが、高橋琢也はそれを断わるとともに、文部次官・田所美治にそのことを伝えた。日本医学専門学校は最終的に山根正次理事長と磯部検蔵理事が退任し、中原徳太郎、塩田広重らが新理事となって立て直しを図ったが、それは大正 7 年 4 月以降の話である[18]。本部会記録はさらに以下のように続く。

高橋先生訪問（後藤）

五日に先生を訪問したるに、磯部氏は今非常に困難の中にあり。文部省も処置に窮す。或は此方にて買収するやも知れず。買収して利益の事あり。

即ち認可うくる事、授業が有効となる事となり、日医の土地と校舎とは使用されず。吾妻氏は病院に金を投じ、人物は悪るからず。

買収となれば、校名も改め、学生も引きとらざる可からず。その時は学生に相談す。文部省にては日医は十二月になれば、債務者の手にて自然消滅となるべしと云う。この事は意外に早く進行すべし。若し引きとるとしても確実の仲介者を入れてなす。日医のつぶれる事は事実なり。指定の事も考えて居る。

本日、古川（道之助）、土遠野両氏、高橋先生の命令に依りて米人マキム氏の処に展覧会趣意書を持行く。本日多忙に付、面談出来ず。明後日来れと。

次に聖路加病院に久保氏を訪う。在らず。

田沢（鐐一）先生の紹介にて池田学士と会い、二十一枚渡す。外に外科医学士に三枚づつ配布す。次に立教大学に行き、スナイダー氏に会い、展覧会の事に付語る。来る月曜日午前十時再会を約して帰る。

この日の会議で、日本医学専門学校の状況が最悪となっていることが明らかとなった。また、展覧会とは高橋琢也と学生達が行った上野日本美術協会における絵画骨董頒布会のことである[5]。学生達は立教大学マキム主教やライフスナイダーに面会し、展覧会の趣意書を手渡している。二人は上野美術協会を訪れ、絵画を購入して帰っている（12 月 22 日）。本部会はこの頃、上野美術協会内において開催されている（12 月 15 日より 12 月 25 日まで[16]）。12 月 17 日に開催された本部会で、古川道之助が立教大学を訪問した報告がなされた。

本部会記録 / 第十九回本部会議　大正六年 十二月十七日　午後五時半　上野美術協会に於て開会す。

〇古川（道之助）氏、米人訪問報告

一昨日、私は高橋先生の内命を受け、展覧会並びに絵画の趣意書を携帯して立教大学を訪いしも　生憎会う機会を得ず。本日の午前十時に再会を約して本意なく立帰りし。約束通り本日立教大学を訪う。而してマキム氏に面会し、程なくスナイダー、元田（作之進）氏を迎え入れて、三人と対座して語る。（以下は殆んど元田氏との会話なり）元田「あなた方が紛擾を起した理由と、其後の成行きとを詳細に承り度い」、と。

依って吾等が刊行せる「奮闘之半年」[12] あるを聞かす。「それじゃ是非一部呉れ」と懇請された。次に高橋先生と吾々との関係を問われた。

マキム、スナイダーの両氏より「高橋先生は医者ですか」との質問を受けると、元田氏即座に代って「先生は人格の人、政治家である」と答えられた。

次に元田氏より「来年一月、マキム氏が学校問題を携げて（米国へ）帰国する筈である。之れには色々の希望が含まれてある。先ず、買収費として十万円、其の基本金として十万円、都合さしあたり二十五万円を要するわけだ。高橋先生が果して学生本意であって、自己本位でないとすれば、此場合合併しても差支えはなかろうね。」と。「高橋先生の御意見としては、学生の為めとあれば此の際二、三万円の金を寄付しても良いとの仰せです。」

「立教大学と合併する場合に於て、高橋先生より少し位寄付して頂けるか。」と訊かれたから、「其の位の寄付には御異存なかろう」と答え置いた。

「其の金額は凡そ五万円位、是は買収後で。立教大学医学専門部開設の為めに要するのだ。」次にマキム氏より「日本医専の敷地坪数は如何程あるか」と問われたら、元田氏代って「凡そ一千坪位のものでしょう。而して大分校舎もあるようだね。」と。

古川氏急いで此の言を遮り、「校舎はある

事はありますが、何れも小さな教室ばかりで、殊に三階校舎の大きなのが出来かけて居りましたが、金に困って他所に売りました。今じゃ其の跡が空地となってテニスコートとして使用されて居ります。若し買収問題が成立しましたら、先生方の御考えは日本医専の方を使わるる御思召ですか。」と反問した。

而して茲に於て古川氏極力反対を称え、其の不利なる点を列挙す。翻って東京医専側の有利な点を述べ、詳細に亘つて自家広告す。

(其結果三人の意志に動揺あるを認む)

「土地への金は未だ全部済まぬでしょう」と元田氏の問い。

「そうです。其の土地へ入れる金が不足してるので、今度高橋先生が所蔵の書画骨董品まで御売りになって、金を揃えて居らるる事と存じます。」と、古川氏答う。

次に元田氏と外人二人との内輪の話。

「大久保の方は土地は広し。目下校舎を建造中で、文部省に対し指定の要件に適えるように準備してるそーだ。又池袋から近いから誠に都合が良い。」

古川氏の方に向き直って「合併すれば学生は来るかね。」

「其処に無謀な条件でもなければ、学生は好んで行く積りで居ります。」次の此方より、「若し日本医専を買収するようになりますれば、先生方は如何なるでしょう。」と質問した。

「それは多少の変動を見るでしょう。」と。

古川（道之助）氏茲に於て、絵画の趣意書に記載ある教授連の名を示し乍ら、

「私の方の先生は何れも良い先生達ばかりで、非常に熱心に教えて呉れます。然るに日本医専側の先生達は、月給が長い間渡って居ない為めか、何れも欠勤がちです。」此の点、三人共同して頷かる。

「是迄日本医専を卒業した人達に対して、如何なる処置をとったら良いかね。又彼等の校友もあるだろうに ------ 。」

「それは貴下方が想像なされて居る程ではありません。現在の日本医専の前身日本医学校を出て医者になった者は殆ど郷里に居って、顧みる者ありません。それに日本医専を卒業した者は至って僅少で、昨年漸く第一回の卒業生を出した計りです。要するに現学生と卒業生との間に少しも密接な関係が無いものと信じます。」

「立教大学と東京医専とが合併する事に就て、此際高橋先生より金五万円位の寄附があれば、話を進める上に大分都合が宜い。殊に学校の敷地でも寄附して貰えたら非常に便宜だ。」と元田氏が語られた。

(古川氏に土地一坪の価は如何程で買い取ったかとの問いに、確かな事は知らんが、二十九円位だと覚え居りますと答えて置いた)

次に、マキム氏より、「高橋先生と一度お目に懸り度いな。」と言われたら、

「今会われぬ方が宜しかろう。何となれば学生共は今高橋先生の為めに、非常に働いて居るから、其処へ立教大学との合併問題が知れると、運動に障害とならんとも限らない。」と元田氏が打消された。

「それじゃ高橋先生と代わる可き位置の人と、帰米する前に一寸面談したいが -----。」

「それなら宜しかろう」と相談一決した。

「此の間文部省に行って見たら、君の方で審べた日本医専の財政調査の書類がありました。文部当局でも之れが事実に近いと思われると言って居たそうな。今其の写しを私の方へも寄越して呉れんか。」と頼まれたから「それは出来るだろうと思います。」と答えた。

次に本校の協賛者の人数、人名を聞かれた。此時恰度折良く、協賛員名簿を携帯しておったから、早速之れを示した所、各大臣を初め、天下一流の士を網羅したり、且つ千名近くの人員に驚嘆された。

加うるに何れも確実なる事を附加した。

「こんな立派な人達が協賛員であって、而かも千名近くもあれば、是れ程結構な事はない。是非是れをタイプライターにして、本国に持ち帰りたいから、其の写しを呉れ。」と懇請された。

序でに協賛員を揃えた趣意書と、物理学校の仮校舎で用いた本校規則書とを求められた。他は磯部の人物に就き悪口が交さる。

古川氏の帰りがけ、「今度は元田氏の宅にて会わん。」と語らる。因に元田先生の御宅

は西大久保四の五八なりと。

合併後は勿論、日医の校名を附せず、又磯部、山根の一派は全然関係を絶つ可しと申さる。序で精養軒の会合の事を語り、展覧会並びに絵画に申込まるる様、依頼して辞し去る。

12 月 22 日、立教大学のライフスナイダー総理、マキム主教、元田学長らが上野美術協会を訪れ、後藤哲雄、中本富太郎らの本部会委員らに面会を求め、さらに高橋琢也との面会を求めた。ここで、初めて高橋琢也との会談となった。そのやりとりは次のようなものであった。

本部会記録 / 第二十一回本部会　大正六年 十二月二十二日　午後五時開会

報告事項

◎午前十時 〈チャールズ・〉ライフスナイダー、ジョン・マキーム、元田作之助の三氏、後藤（哲雄）、中本〈富太郎〉、春山に面会に来る。館内巡視の後、高橋先生と対面す。後藤、山本は次室にあり襖越に会話を聞く。大要次の如し（山本報告）

（元）　元田氏　（T）　高橋氏　（ス）スナイダー（正しくはライフスナイダー）氏

元田氏来意を述べ、先生に対面したしと思いしも機を得ず。又機会なかりき。今日は幸いの好機なれば、打明けて話したし。とまず磯部氏のことを語れり。

（T）　より七月十五日、杉浦局長（正しくは松浦局長）より電話がかかりし当時の事を詳細に述ぶ。東京医専の敷地坪数は四千三百六坪、校舎五百二十坪、又自己所有の土地は室蘭に一万三千坪、旭川に一万三千坪あり。すべて売却の交渉中なり。

先日、磯部（検蔵）氏来り百六十五円の金よりはじめて今日の学校に至りし迄の経過を語れり。自分は文部省より聞きて、外人問題は中止とのみ思いしに今だ中絶せしにあらざりや。

自分は学生本意に立ちたる事なれば、学生の為になる事なれば賛成す。

自分は元来山林の事のみに従事せしが、昨年来学校にたずさわりて以来、種々の会社の創立委員長になりてくれよと来るもの多けれも、すべて拒絶しつつあり。

今、合併問題がおこり、若し文部省が仲介に入り学生の為になる事なればよし。自己の予算は東京にての寄附金十万円、横浜二万円、大阪、神戸五万円、地方より三十五万円（?）、絵画にて五万円、自己より十万円、大体に於て二十万円は容易に出来ると信ず。

（元）　磯部（検蔵）氏は誠心誠意にて貴下を訪れしや。

（T）　それはわからぬ。有名なる磯部の事なれば、自分に云うことと貴方に云うこいととは相違することなるべし。

（元）　合併が成立せし際、あなたが今日迄つくられし協賛員は如何にせらるしや。協賛の意義が変更することなきや。

（T）　自分が合併せし後の学校に居らざりしは或は意義が変わるものやも知れず。もしその懸念なれば自分が先に金を集めて合併になりし学校に金を出せばよし。不可能の際は新校の何か役員に入れてくれればよし。

文部省は処置をあやまり、自分の方の寄附の三井、三菱にも外人問題の為にそれを差止めたり。して責めれば何かと弁解して要領を得ず。

文部省は近来しきりに医師過剰を以て口実とするも、それは法学生の現状を見るも意味を為さず。過剰なるは医者のみならざればなり。

（元）　理屈は御尤なり。学生は勉強しておるや。御校にはクリスチャンが多き模様なり。先日来訪の三名の中にも二名の宗教学校出身者ありき。

合併問題はうまくやりたきものなり。来春二月本国に帰る時に、本国に強き印象を与えうる何者かを持ちてゆきたし。それは日本に於ても金或は土地を寄附する人が出来たりと云うが如き。先生は骨董を売り、その他金が入る故、都合よからん。

日本医専への交渉は自分の方にてなすべきか或は貴方よりなさるるや。

(T)　それは私の方からよかるべし。磯部は外人に対する口調と自分に対する時とは自分に対する方が詭弁少し。

(T)　石井（菊次郎）氏等の尽力せし三十万円は如何にせしや。

(元)　その金はすぐに出してくれと云えばすぐ出してくれるものにして、持参せしにはあらず。

(ス)　寄附金額は幾許ありや。

(T)　百円以下はとらず。千円、五百円、三百円、二百円等の口あり。今は急にいりし手をつけず。

総計十五万円はさして困難なく集めらる（山本条太郎、磯部氏よりその他五六名の名を読み上ぐ）

(ス)　来月十日に帰米す。二十万円の金はあり。

(T)　あなたの手紙は文部省にて聞きたり。

(ス)　十一月六日にかえりし時、この件はまとまりしと思いしも、かくの如くなれり。こんどはうまくゆくことと思う。

(T)　文部省にては大臣、次官、局長の意見がことなりてこまる。自分は文部省をねげる材料は沢山有せり。この要はあくまで文部省も責任を持たしうむることを要す。

(元)　只今迄の対話を書面として捺印してもらいたし。

(T)　それはよきことなるも、然しかくの如きものを書きては文部省に対して責任転嫁の口実を与える恐れあり。只展覧会場にて偶然あわんと云う方が面白からずや。

(元)　それでは自分が今迄の対話を書面にし、御迷惑なき様にし自分が捺印し、貴下に御目にかけて後、本国にやりたし。有力のものなればなり。

スナイダーは三百円の屏風、マキームは百円の羅漢の軸をもとめて去る。

ライフスナイダーが1月10日（実際は1月13日となった）に米国に帰国するという情報が学生達にもたらされたことから、見送りに行くことが検討された。

本部会記録 / 第二十二回本部会　大正六年 十二月二十六日　午後六時半

報告事項

外人関係（江並猛）

一月十日にライフスナイダーは帰国す。目的はトライスラーの意見を翻さん為なり。ス氏ははじめ不完全の学校より漸次完成せしめんと。ト氏ははじめより完全な学校をつくらんとするなり。

提案事項

ライフスナイダー出発の際、見送り且つ機を見て外人に接近すること。

4）結末

年が明けて、大正7年1月4日に本部会会議が開かれた。そこでは昨年末の高橋琢也と立教大学責任者との会談の内容が披露された。

本部会記録 / 第二十三回本部会議　大正七年 一月四日　午後二時半開始

▲報告事項（佐多正蔵君）

前日の電話に由り、一月一日午前中後藤氏と共に立教大学に行く。元田先生と門前にて会う。大学校学長室にて中屋氏と面談す。

「立教大学拡張と日米親善」と云う小冊子一部を渡され、併せて上野に書画骨董展覧会開催に砌り、ライフスナイダー、マキム氏並に元田氏との二名が高橋琢也先生と会見の折、元田氏が聴き取られし「高橋琢也氏の談」と云う草稿を示されて、高橋先生の検閲を得たしと申込まる（別記参照）

依って立教大学の帰途、高橋先生宅に行き、其の旨を申伝えしに、一部分訂正を致すしたる計りにて大部分は同様なりしと。

此の時先生に対し「五万円寄付云々」の記事を見出さざる故、書き込もうと学生が云いしに「まあそれで宜い」と仰せなりし。

而して立教との合併は、先生に於かれて其の学校の援助者となり、或は顧問、評議員等の名義にて関係せらるべしと伝えんに、先生は莞爾として会心の笑みを洩らされんと。

立教大学にて中屋氏と会見の折、学生が

聞き得しに、三のものを挙ぐれば、次の如し。

1. 立教大学の真の要求は、立派な医学部を設けたる後、東医、日医とも合併したき意向なりと。
2. 元田氏の談として、此際立教、東医、日医の三者各々損をする積りで、此の事に当らねばならぬ。其の覚悟で居て欲しいと云わる。
3. 立教大学側にては、今年三月まで医学部を設けたい希望なりと。
4. 今年二月、紐育（ニューヨーク）に於て開催の米国会議を経て、好結果を電報にて報道せし時は、直ぐ様文部省へ向け出頭し得るように、準備が出来て居ると語らる。

附録「高橋琢也の談」

1. 自分が東京医学講習所を設立するに至りたるは、日本医学専門学校を退きたる四百余名の不幸なる学生を救済せんが為なり。
2. 校地として東大久保旧監獄跡、4200余坪を選定して、之を拾余万円にて購入するの契約を成したり。又、校舎壱棟と附属病院とは目下建築中にて来年（大正七年）一月中には落成の見込あり。
3. 右に要する資金調達の為め、自己の所有に係る数ヶ所の地所を売却する事に決し、既に売却したる所もあり。尚お目下は自分所有の書画骨董展覧会を催し、其の売上げ高を以て右費用の一部に当てんと欲す。
4. 自分は此頃二三会社の重要なる地位に招聘を受けたるも、此の事業経営の為め何れも謝絶したり。
5. 先日日本医専の磯部氏は自ら来りて、日本医専を引渡さんとの意思を漏らされたり。之に対して未だ談判を進捗せず。
6. 立教大学に併合することとなれば、四百余名の学生を引渡し、且つ自分が投資したる財産に対して賠償せざる可し。学生救済の目的を達すれば予は満足なり。
7. 日本医専を引取るとすれば其上にて立教学院に引移すも差支えなし。立教学院にとりては其方却つて便利ならんと思わる。
8. 全国に渉りて賛助員約千名を得たり。其の重なる人々には自分面会して快諾を求めたり。之等賛助員の中、既に寄附をなせしものあり。
9. 東京在留の賛助員中より、壱拾万円、横浜二万円、絵画二千余枚代三万円、京阪地方よりは五万円、其他の地方より拾万円を合して漸次三十万円を募集する見込あり。此度、東京医専の設立に関しては私財全部を投じたり。

   依て若し協賛員よりの寄附金が相当の額に達したる暁は子女教育費拠出を乞うこともある可し。
10. 文部省より立教学院へ合併する事の誘導を受け、それは承諾したり。同時に文部省より寄附者に其の事を話したる為め、寄附者は躊躇し目下寄付金不十分なり。

雑語（高橋先生を訪問せし時、聞き得し事共）

△病院の方へは先きに壱千円を入れ、後六千余円を入れて全部支払済みとなれり。

△土地の方へは此際内金若干を入れ、残余は大正七年六月迄猶予して貰うことに定まれりと。

△高橋先生宅の家屋並に屋敷は先生のものにあらずと。

立教大学のライフスナイダー総理とマキム主教は米国における募金活動が思わしくないことから、1 月 13 日に渡米することを決心した。両者には立教大学医学部設立を是非とも推進したいという強い思いがあったのであろう。1 月 9 日の本部会会議では、1 月 13 日に米国に出発するライフスナイダー総理、マキム主教を横浜港で見送ることを検討した。

本部会記録 / 第二十四回本部会議　大正七年 一月九日　午後三時　開始

▲報告事項

立教大学総理ライフ・スナイダー氏並に監督マキム氏は立教大学医学部を設くるに就き、一月十二日午後三時鹿島丸に乗じ米国に出帆する由。依って見送りの為め、本部員より青山、古川、大沢、荒瀬の四氏横浜桟橋まで行くこと。

1月14日の本部会会議では、1月13日に横浜港からのライフスナイダー総理、マキム主教の米国行き見送りを行なった報告がなされた。

本部会記録 / 第二十五回本部会　大正七年 一月十四日　午前十一時四十分

大久保新校舎に於て始業式挙行後　臨時杉山氏宅にて本部会議を開く。

▲報告事項

其一（荒瀬君）　一月十三日、横浜出帆の鹿島丸にて、スナイダー氏、マキム氏の両氏帰米の事なれば、本部を代表して其見送りに横浜迄行く。然るに遺憾ながら積荷の都合にて翌日に延期せり。

一月十三日　青山君と共に新橋駅に於て帰米者を見送り、漸く目的を果たす。

其二（佐多君）　一月十二日、横浜港オリエンタルホテルを訪問し、立教大学の人々に会い、本部の名刺を渡して帰る。

大正7年1月となると、東大久保における新校舎がかなり出来上ってきたことから、立教大学問題とは別に、東京医学専門学校承認問題が差し迫ってきた。文部省からも、高橋琢也の履歴書や高橋琢也が保有する北海道、青森の土地の謄本を提出するよういわれている。これは主に田所美治文部次官の考えによるものであり、部下の松浦鎮次郎局長の考えとは相容れなかった。

本部会記録 / 第三十一回本部会議　大正七年 二月七日　午後三時　四谷永住館に於て開会

▲報告事項　二月六日午後七時高橋先生訪問

其一　高橋先生訪問（中本）

認可申請の件

既に認可申請は昨秋十一月中提出せり。昨今東京府庁に於て「是ならば宜し」と云い無事に通過せり。次は文部省なり。此際、高橋先生の履歴書並に北海道、青森の土地謄本を添え提出せよとの内命あれば、目下取急ぎ其の準備中なり。

文部次官の談

嘗て（田所美治）文部次官の談として、立教大学との合併、日本医専の買収は共に困難なれば、先ず文部省にては東医に認可をやる心算なり。（事茲に至れば詮なし。止む事を得ず認可を与えんとの意向）。依つて余は早晩認可の来る可きものと信ず。

財団は金弐拾萬円として願い出ず。

(b) 日医買収の件　先生は「それは至難なりと思う」と云わる。

之れ、元田氏が金子堅太郎氏へ伝え、金子氏が高橋先生の耳に入れしなりと。此報余りに早くして信を措き難し。而して米国側より、森村（市佐衛門）、渋沢（栄一）の両氏に寄附金を請求し来りしも、両氏は拒みて之に応ぜざりきと。

先生には、「文部省は何日頃認可を呉れる積りか」と云う。最後の確答を得可く、本日文部省に出頭せしも、文部大臣並に次官は閣議の為め不在なりき。

大正7年2月8日に本部会学生委員である後藤哲雄は元田作之進総長を訪問し、米国における寄附募集状況について尋ねた。

本部会記録 / 第三十二回本部会議　大正七年 二月八日（金）　午後七時半　四谷永住町三　永住館に於て開会

▲報告事項

（其一）元田氏宅訪問（後藤）

昨夜八時半頃、西大久保に元田氏を訪問す。而して米国側より何か報道なきかを尋ぬ。曰く、「今月五日本国に於て会議開始する筈なれば、もう二、三日して学生会本部の方より立教学院の方へ電話かけて見て呉れ」と頼まる。

立教学院と聖路加病院との関係

次に参考として、高橋先生対金子（堅太郎）氏の談を語る。曰く、「それは何かの間違いならん」と。

次に又立教大学と国際病院（= 聖路加病院）

の関係に就き聞く。曰く、「何等関係なく、トイスラー氏とマキム、スナイダー氏との関係は兎角面白からず。今聖公伝道局より金弐拾萬円の金を引出しに行き居るなり。附記　今夜八時半頃、高橋先生より電話あり。曰く、「明日の会合には成可く都合して列席せん」と。

本部会記録 / 第三十三回本部会議　大正七年 二月十二日（火）　午後四時　四谷、永住館に於て開会す。

▲決議事項　立教大学に電話をかけ、米国よりの沙汰を聞くこと。

大正 7 年 2 月 12 日、米国からの報告が電報によりなされた。その結果が本部会で披露された。

本部会記録 / 第三十四回本部会議　大正七年二月十四日（木）　午後七時　四谷永住館に於て開会す。

▲報告事項

日米問題（佐多）

一昨日の朝九時頃、立教大学に電話をかけて、例の問題に就て訊ぬ。曰く、米国より次の電報来る。

米国よりの電報

Medical school disapprove.

即ち本校と立教学院との合併問題は不調に終る。元田氏甚しく失望の態なり。而して三月初め、米国派遣員帰朝するとの事なれば、尚其上に相談す可しと。

（此の間の事情は甚だしく纏綿す）

大正 7 年 7 月 17 日の文部省専門学校局長・松浦鎮次郎の一本の電話によって始まった立教大学医学部設立問題は、ライフスナイダー総理やマキム主教らの米国におけるロビー活動の努力も空しく不調に終わり、この日であっけなく終焉となった。元田作之進立教大学学長の落胆は大きかったことが、本部会記録[16]（上記下線）にも残されている。これらの経緯は東京医科大学五十年歴史[19] に要約が記載されているが、立教学院百年史[12] には全く触れられていない。いわゆる幻の「医学部設立構想」となった。なお、立教大学側の当時の資料は関東大震災によりすべて焼失し残っていないことから、以上の話は立教大学では「日本医学専門学校の買収計画」があったことが僅かに伝えられているのみである（立教大学立教学院史資料センター）。大正 6 年 11 月 1 日より大正 7 年 2 月 12 日までの経緯は**表 2** にまとめた。

一方、高橋琢也は東大久保の地に新校舎の建設を継続的に続けており、いよいよ東京医学専門学校認可に向けて最後の仕上げを行う時期となってきた。それにもかかわらず、また立教大学医学部構想が頓挫したにもかかわらず、松浦鎮次郎局長は東京医学専門学校承認を決して行わないという方針を貫いていた。松浦の上司である田所美治次官は高橋琢也を支援し承認するという方針、岡田良平文部大臣は松浦の意見を取り入れて不承認という線を出しており、文部省内でも考えがくい違っていた。

元田作之進学長、ライフシュナイダー総理、マキム主教らの立教大学首脳部は医学部設立問題について文部省から依頼があったことから誠意をもって積極的に活動してきた。しかしながら米国での募金状況が芳しくなく、やむなく断念することとなった。東京築地より池袋への大学本体の移転はその後大正 8 年まで続いた。立教大学は最終的に大正 7 年に制定された大学令によって大正 11 年に正規の大学として承認された。その後の立教大学の発展は良く知られているとおりである[12]。次号では、高橋琢也の東京医学専門学校認可に向けた活動と最終段階の出来事を、松浦鎮次郎との凄まじいやり取りを交えて詳述する。（以下、次号に続く）

文献と人物

1）　高橋琢也（1847～1935）：広島藩出身。明治 3 年（1870 年）、大学南校・ドイツ語教授。陸軍省参謀本部翻訳局を経て、明治 18 年（1885 年）に農商務省山林局に入る。東京農林学校校長、青森大森林区署長、農商務省山林局長を歴任。我国初の森林法制定（明治 30 年）に尽力。大隈重信が明治 30 年に農商務大臣となり、非職となる。同僚の高島（得三）北海や原敬（のち総理大臣）も同様に非職となった。その後、宮内省顧問、北海道庁顧問、北海道山林会会長、北海道軽川軽便鉄道重役など併任したが、中国亡命者（孫文、梁啓超、康有為）の支援にも関った。原敬の推挙により沖縄県知事となり、沖縄の近代化に力を注いだ（大正 2 年～3 年）が、大隈重信が総理大臣となったことから辞任した。大正 5 年（1916 年）当時は日本医学専門学校の学生（広

表 2　立教大学医学部設立問題の経緯（大正 6 年 11 月 1 日より大正 7 年 2 月 12 日まで）

大正 6 年	
11 月 1 日	**学生団学生達は本部会を結成し、活動を開始した。**
11 月 6 日	フィッシャー博士が米国より日本に戻った。入れ替わりに聖路加病院病院長トイスラー博士が募金活動のため渡米した。
11 月 11 日	本部会学生委員・江並猛が立教大学を訪問した。
11 月 13 日	高橋琢也は文部省に松浦局長を訪問。松浦は 11 月 20 日に立教大学医学部問題の返事を回答すると述べた。
11 月 14 日	高橋琢也は金子堅太郎子爵を訪問し、立教大学医学部設立問題の相談をした。本部会学生委員・古川道之助と江並猛は立教大学マキム主教とライフスナイダー総理に会見。医学部設立問題について質す。
11 月 22 日	**古川道之助はマキム主教を訪問し、日本医学専門学校を合併しないよう要請した。マキム主教より、米国より立教大学医学部設立問題は中止の旨の電報が届いたことが伝えられた。**高橋琢也は大阪で募金活動を行なっていたが、本部会より電報でそのことが伝えられた。
11 月 25 日	本部会学生達は文部省に建白書を出すことを検討した。この日の夜、大阪より戻った高橋琢也を長委三美が訪問した。翌 26 日に後藤哲雄らが高橋琢也を訪れ、立教大学医学部問題の状況を検討した。
11 月 27 日	高橋琢也は文部省を訪問したが、立教大学医学部設立に関しては文部省より話がもち出されたことを知った。
11 月 29 日	高橋琢也は立教大学学長・元田作之進を初めて訪問した。
12 月 2 日	**日本医学専門学校理事・磯部検蔵が高橋琢也を訪問し、日本医学専門学校の買収を要請した。高橋琢也はこの件を断った。**
12 月 3 日	高橋琢也は文部省に田所次官を訪問した。
12 月 4 日	高橋琢也は文部省を訪れた。
12 月 17 日	本部会学生・古川道之助は立教大学に元田作之進学長、ライフシュナイダー総理、マキム主教を訪問。
12 月 22 日	**高橋琢也は上野美術協会内で、元田作之進学長、ライフシュナイダー総理、マキム主教と会見。**
大正 7 年	
1 月 4 日	本部会学生委員・後藤哲雄、佐多正蔵は立教大学を訪れ、元田作之進と会見
1 月 13 日	横浜よりライフシュナイダー総理とマキム主教が米国に向けて渡航（米国における募金活動の推進と立教大学医学部構想の最終的な承認に向けて）。学生代表は見送りに行った。
2 月 12 日	**米国より「Medical school disapprove.」という電報が立教大学へ届き、立教大学医学部設立構想は終焉となった。**

島県出身者）の保証人となっていたため、学生達の総退学に際して支援を行なっていった。大正 8 年には山林局長時代の功労と東京医学専門学校の創立の功績により貴族院議員となり、大正 9 年にはこれらの功績により勲三等を叙せられた。東京医学専門学校（現・東京医科大学）の学祖として尊敬されている。著書：「万国政表」（翻訳）、「森林杞憂」、「町村林制論」、「森林法論」、「起て沖縄男児」。雑誌「国論」の主筆。

2）岡田良平（1864～1934）：静岡県掛川出身。明治 20 年（1887 年）、東京帝国大学文学部卒業。1893 年に文部省へ入省したのち、長く文部官僚を務めた。1916 年には寺内内閣で文部大臣となり、それまでの帝国大学令を改正し、大学令を制定した。1924 年の加藤内閣、1926 年の若槻内閣でも文部大臣を歴任した。

3）田所美治（1871～1950）：明治 28 年（1895 年）、帝国大学法科大学（東京帝大法学部）卒業。文部省に入省し、長く文部官僚を務めた。大正 5 年 10 月より文部次官を務め、大正 7 年 9 月より貴族院議員。高橋琢也とは懇意であり、高橋を終始支持した。

4）松浦鎮次郎（1868～1945）：愛媛県宇和島出身。東京帝国大学法学部卒業後、内務省に入った。文部省参事、専門学校局長、文部次官を経て、昭和 4 年には九州大学総長、昭和 15 年には文部大臣となった。大正 6 年より 9 年にかけて、明治維新以降の教育制度を大幅に見直し改革するための大学令制定に向けて、松浦鎮次郎は岡田良平文部大臣、田所美治文部次官らとともに総力を挙げていた。その中にあって、松浦は東京医学専門学校の承認を最後まで反対した。高橋琢也と松浦鎮次郎との壮絶なやりとりは高橋琢也日記に記述されてある。その後、高橋琢也の真意を知って東京医学専門学校が設立されたのち、評議員となった。高橋琢也の葬儀（昭和 10 年）には福岡より参列した。

5）高田早苗（1860～1938）：江戸出身。東京大学文学部（明治 15 年）を卒業したのち大隈重信の立憲改進党に参加した。大隈とともに早稲田大学の前身である東京専門学校の設立に参加し、その運営に注力した。1907 年早稲田大学初代学長、大正 12 年（1923 年）より 9 年間同大学総長を務めた。この間、大隈重信内閣で文部大臣（大正 4 年より大正 5 年まで）となった。康有為ら中国亡命者の保護活動にも力を貸したが、そこで高橋琢也と接点があったと考えられる。

6）山根正次（1857～1925）：長州萩藩の御典医・山根孝中の子息。明治 15 年（1882 年）に東京大学医科大学を卒業。森鴎外、中濱東一郎の一年

後輩であった。衛生学、法医学の専門家。司法省に入省したのち、ヨーロッパに留学し各国の衛生行政制度を研究した。我国の警察医務の基礎をつくり、朝鮮ではらい病院の設立に貢献した。明治 35 年（1902 年）より衆議院議員。私立日本医学専門学校設立に関わり、理事長を務めたが、長期不在のため学生達のストライキに対して対応できず、大正 7 年に退任した。大正 9 年に政界を引退した。

7）寺内正毅（1852～1919）：長州藩出身。日露戦争末期の陸軍大臣。大正 5 年 10 月より大正 7 年 9 月まで内閣総理大臣を務めた。

8）臨時教育会議：帝国大学令が時代にそぐわなくなってきたことから、大正 5 年、寺内内閣の岡田良平文部大臣は国立大学、私立大学を含めて欧米並みに新しい大学を認めようという大学令制定を目指した。臨時教育会議はその諮問委員会であった。大学令は岡田良平文部大臣、田所美治文部次官、松浦鎮次郎専門学校局長らにより進められ、戦前の我国における最大の教育改革であるといわれた。

9）天野郁雄：大学の誕生　中公新書（上）（下）2004 年

10）東京医科大学維持会：奮闘の半年（復刻版）1996 年

11）立教大学：明治 7 年（1874 年）、ウイリアムズ主教により東京築地に英語と聖書を教える私塾がスタートし、立教学校と称した。1896 年には立教学校を廃止し、立教専修学校と立教尋常中学校を設置した。1907 年の専門学校令により、立教大学として発足した。大正 7 年（1918 年）に池袋に移転し、本館、図書館などが落成した。大正 11 年（1922 年）に大学令による大学として認可された。1949 年に新制大学として認可され、現在に至っている。

12）立教学院：立教学院百年史　1974 年

13）元田作之進（1862～1928）：久留米藩出身。明治 19 年（1886 年）に渡米し、ケニヨン大学を卒業。さらにフィラデルフィア神学校を卒業し、教会長老となった。帰国後は立教中学教員となり、明治 40 年に立教大学初代学長となり、大正 6 年当時の学長でもあった。大正 6 年は立教大学が築地より池袋へ移転の最中であり、本格的な私立大学（大正 9 年までは大学の名前は冠していたが、専門学校であった）としてスタートを切ろうとしていた。ここに医学部併設の構想が持ち上がり、文部省もそれを支援したことから、高橋琢也の東京医学専門学校設立に大きな障害となっていった。

14）ライフシュナイダー：立教学院総理・初代総長（1912 年より 1940 年まで）。ケニヨン大学卒業。文学博士。1902 年に来日。1912 年に立教学院総理に就任、以来 28 年間にわたり立教学院と立教大学の発展に貢献した。第二次大戦後はアメリカ聖公会代表として、大学の復興に寄与した（立教学院百年史による）。

15）高橋琢也：高橋琢也日記（大正 5 年～昭和 3 年）。（東京医科大学歴史史料室に保存）

16）東京医学専門学校学生団：本部会記録（復刻版）。1971 年

17）金子堅太郎（1853～1942）：福岡藩出身。明治維新後に米国ハーバード大学に留学し、法律を学んだ。伊東己代治、井上毅らとともに、大日本帝国憲法の起草に参加。日露戦争では米国で外交交渉などに当った。生涯、日米友好のために尽力し日米同志会の会長を務めた。大正 6 年には日米協会会長に就任した。高橋琢也が明治 30 年に森林法制定を策定したときの、農商務省次官であり、それ以来高橋琢也とは懇意の間柄であった。高橋琢也が進める新医学校設立の途中で、立教大学医学部設立構想が浮上した際、高橋琢也に米国での状況をいち速く伝えた。また、日本美術協会の副会頭であったことから、高橋琢也や学生達の進める日本美術協会での絵画頒布会に多大な協力をした。

18）日本医科大学：日本医科大学十五年記念誌。1940 年

19）東京医科大学同窓会：東京医科大学五十年史。1971 年